

# いのちの伝言

— 私の戦争体験より —



# 桶川市平和都市宣言

恒久平和は、人類共通の念願である。

しかるに、大国間における核軍備の拡張は、ますます強まり、世界平和、人類の生存に深刻な脅威をもたらしている。

我々は、世界最初の核被爆国民として、今なお続く被爆者の苦しみを思うとき、この地球上に再び、ヒロシマ・ナガサキの惨禍を繰り返さないことを、全世界の人びとに訴える。

我々は、恒久平和を求める立場から、非核三原則を守り、すべての核保有国に対し、核兵器廃絶を求めるとともに、軍備の縮小を強く要求するものである。

ここに桶川市は、平和への誓いを新たにし、厳粛に平和都市を宣言する。

昭和60年1月1日

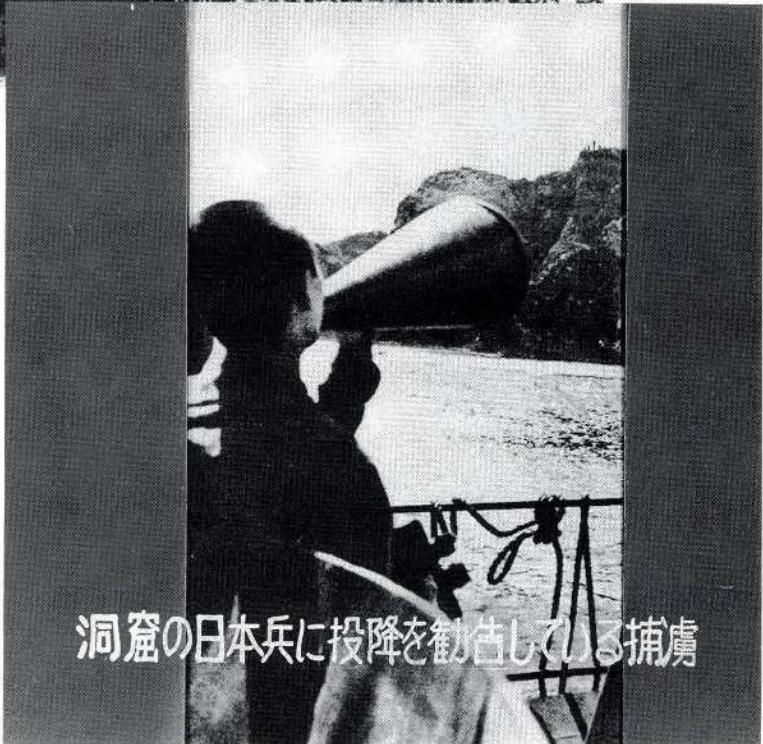
桶 川 市







焼けだされた走人



洞窟の日本兵に投降を勧告している捕虜











捕虜収容所で身体検査をうけている日本兵



自決した日本軍司令官牛島中将の墓標



収容所へ送られる沖縄の住民たち



元ひめゆり学徒隊 与那覇百子さん提供

「いのちの伝言——私の戦争体験より」

## 発行に寄せて



桶川市長 上原 榮 一

戦後50年、わが国は廃墟から立ち直り、驚異的な経済復興を成し遂げました。しかし、今、私たちが当たり前に享受している平和と繁栄が、多くの人々の犠牲の上に成り立っていることを忘れてはならないと思います。

桶川市は、世界の恒久平和を願い、昭和60年1月に平和都市宣言をいたしました。既に昭和57年より毎年8月6日から15日までの間を「平和を考える10日間」として、平和に関するさまざまな事業に取り組んでまいりました。

その一環として、昭和62年度より市民の皆様より戦争体験記を寄せていただき、広報おけがわに掲載してきました。このたび、戦後50年という節目の年を契機とし、これまで寄せられた

体験記を冊子にまとめることにいたしました。

戦後生まれのいわゆる「団塊の世代」の方々が無事50歳を迎えようとし、その子供世代まで成人している現在、戦争というものがともすれば遠い昔の出来事として風化されていくような危惧を覚えます。だからこそ、悲惨な体験というものを、戦争を知らない世代、特に豊かな時代に生まれ育った若い世代にしっかりと伝えていくべきではないだろうか、そうした思いから、この「いのちの伝言——私の戦争体験より」と題した冊子を発行するものです。

いのちの底に刻まれているような痛みを勇気を持って綴ってくださっており、平和の尊さを強く感じたところでございます。「戦争は悲惨なもの、二度と繰り返したくない」という共通の心情がひしひしと伝わってまいります。

ここに、体験記をお寄せくださいました方々に改めて感謝を申し上げますとともに、この冊子が戦争を知らない世代にその悲惨さというものを伝える語部（かたりべ）のような役割を果たしてくれることを心から祈念いたします。

平成八年三月

目次

昭和62年度（一九八七）

桐山隊長を偲んで

大塚 忠一 …………… 1

兵站線は細く遠く

野本 秀男（故人）…………… 3

速やかに白旗をかかげ降伏せよ

甘楽 軍次 …………… 5

昭和63年度（一九八八）

魔のセレベス海

長島 信雄 …………… 7

平和を希<sup>ねが</sup>う

前村 政雄 …………… 9

平成元年度（一九八九）

最後の輸送船団と沖縄特攻

片岡 實 …………… 11

平成2年度（一九九〇）

この一戦に勝たざれば 祖国の行方如可ならん

拜司トヨ子 …………… 13

海軍「神雷部隊」

近藤 陽三  
……………  
14

平成3年度（一九九二）

戦友の死を目前に次は自分か  
沖縄戦を体験して  
東京大空襲がもたらしたもの

榎川 平造  
……………  
16  
与那覇百子  
……………  
18  
和田 ふみ  
……………  
20

平成4年度（一九九三）

敗戦の惨めさ 引き揚げ  
炎の中を逃げた熊谷空襲  
小隊の自決を救う

宮内 洋子  
……………  
22  
早川美知子  
……………  
24  
犬木 貞吉（故人）  
……………  
26

平成6年度（一九九四）

南方空輸記  
焼夷弾の雨の六本木  
集団疎開

増田 哲郎（故人）  
……………  
29  
平野 芳子  
……………  
33  
岡部 正枝  
……………  
35

原爆雲と広島を見た

新井 浩

……  
36

平成7年度（一九九五）

戦争体験記

大坂 正義

……  
38

戦争の傷を後世に伝えて

秋山 昌茂

……  
40

終身忘れられない東京下町大空襲

森 敏五郎

……  
43

五十年前の追憶

白子 邦

……  
44

いのち拾い

小島 壽男

……  
50

天津山丸撃沈と機銃掃射

長島 信雄

……  
51

これが戦争だ

加藤 義二

……  
53

終戦五十年にして私の戦争経験を一言

島村 守

……  
58

子供の目の高さの戦争

中島 京子

……  
60

私の場合

鎌倉 千光

……  
64

戦争の思い出

岡田 愛子

……  
67

学童疎開と空襲と……

田中委左美

……  
69

女子挺身隊の頃

野口 富子

……  
74



昭和62年度

## 桐山隊長を偲んで

大塚 忠 一

加納在住

我が砲兵隊も歩兵大隊に配属され、敵空挺部隊攻撃の命下る。ピルマの乾期は小河川も干上がり、行動が容易である。北上するに従って、橋梁の爆破、道路の阻塞等が多くなり、自動車行軍を二頭引きの牛車に積み替え前進だ。敵の空軍、戦車に対しては、勝てる訳がない。それでも最後の勝利を信じて前進す。火砲を牛車より降ろし、人力搬送の回数が多くなり、体力も限界ぎりぎりである。

破壊された小さな町に着く。町より北方二、三キロ程に小高い丘が見える。敵の陣地である。友軍警備隊が全滅され、友軍守備隊の補給を断ち、インパール作戦を有利にする作戦である。日本空軍は南方方面に引き抜かれ、敵の制空権下では昼の行動が制限され、主に夜間となり星明かりの中では苦戦である。敵陣東方に陣地進入。田園の向こう三百メートル地点が敵地で、歩兵の援護射撃があるが小迫撃砲ではなさない。毎夜の攻撃に友軍歩兵敵陣に接近するが、機関銃に薙倒され失敗である。七日目の早朝、友軍歩兵隊露营地方面で物凄い銃撃音がする。歩兵隊が敵の偵察隊を発見、目下交戦中なりと傳令来た。敵は朝食中で戦

闘は有利に展開中なりと。程なくして敗残兵が我々の露营地にまぎれ込み、ジャングル内で入り乱れて白兵戦となり、中隊長胸部に手榴弾を受け即死、兵五名の犠牲者を出す。砲兵は接近戦では哀れである。二十分位してもとの静けさに戻る。本部より撤退命令が来る。戦友の遺体を埋葬して、またと来る事もない地に涙をのんで後退す。途中敵の死体四十、馬八頭、火焰放射器、重機、多量の弾丸、食器類の散乱あり。数日後、再度陣地攻撃に向かったが、すべての物資はそのまままで敵影なし。北上三日目強力な敵陣地あり。此の戦闘では砲兵歩兵とも、甚大な損害を出してしまった。敵は目的を果たしてか、前回同様後退す。敵の残した缶詰等は利用でき、大助かりである。友軍のインパール作戦も失敗に終わり、それからは南へ南へと苦しい夜間の撤退である。ビルマ南端で終戦となり、以来一か年英軍監視のもと、新設道路作業に従事す。昭和生まれの皆さんには経験がないので、其の度合いはわからないと思いますが、とにかく戦争とは龐大なる物資、人的消耗であり悲劇である。絶対にやってはならない。然し何事においても、いざという時の心構えは必要ではないだろうか。

## 兵站線は細く遠く

野 本 秀 男

(故人 当時末広二丁目在住)

召集令状により、私は昭和十七年十二月相模原の電信隊へ入隊、隊長以下五十二名の独立無線電信小隊に編入された。二月中旬宇品で亜丁丸という輸送船に乗船、途中パラオに寄港、四月二日ラバウルに上陸、第八方面軍通信隊司令部の指揮下に入った。その際、東部ニューギニア方面で激戦中と聞かされた。上陸して間もなく、ダンピール海峡方面へ一個兵団増強配備する事になり、小隊も無線一ヶ分隊を編成し、私もその一員になった。任務は東部ニューギニア方面に対する前進兵站基地カライアイに無線通信所を開設、兵団通信隊と兵站線の状況連絡をする事であった。四月下旬ツルプ行きの大発に便乗。魚雷艇の襲撃を避けるため夜間のみ航行した。ナタモ出発後空襲があり、分隊長が戦死した。目的地は小さな入り海で、ジヤングルが暗く海岸まで迫っていた。二週間分の糧秣を受領し四名で上陸した。

兵站の到着を待つて兵団通信隊と交信を開始した。ニューギニア方面への兵站線は、敵の魚雷艇の哨戒がはげしく、ダンピール海峡は大発の墓場といわれていた。船舶工兵隊の決死の輸送にもかかわらず、糧秣さえも満足に送れない状況だった。前線の部隊は、敵の物量攻撃に対して、飢餓の状態で精神力を頼りの戦闘だったという。前線からの大発には、病氣や飢えて瘦せ細り歩行も困難な兵隊が護送されて来た。

その数が日毎に増加し、正に生き地獄とはこのような事かと思つた。

私は十二月下旬配属替えとなり、ガスマタの平島支隊へ派遣された。私が着任した数日前、ガスマタ西方のマークス岬では、小森支隊が数倍の敵の攻撃により全滅。ガスマタ地区にも昼夜の別なく砲爆撃がつづき、糧秣の補給も困難となり、支隊は軍の命令により十九年三月、道無き百<sup>ポト</sup>余りのジャングルを北岸に向かつて転進した。残された私たち無線分隊は折りたたみ舟艇三艘に分乗し、支隊の出発三日後、槽を漕いでガスマタを後にした。三日目の夜、魚雷艇から砲撃され舟は大破し徒歩でジャングルの中を歩き、数日後大発基地に到着、大発に便乗、ラパウルに帰還した。

当時勇壮な軍歌の前奏で報道されていたという戦況とは裏腹に、南方の島々では言語に絶する死闘がつけられていたのである。そして二十年八月十五日戦争は終わった。

戦後四十二年、当時を回想し平和の有り難さをしみじみと感じています。この平和を皆様と共に何時までも保ち、二度と若い人たちを戦場へ送る事のないよう念じて筆をおきます。

〔編集注〕

野本秀男さんは、平成五年二月十五日永眠されました。

## 速やかに白旗をかかげ降伏せよ

廿 楽 軍 次

加納在住

昭和二十年七月、華北の済南から衣師団通信隊の私たちの部隊は、北朝鮮の咸興市に移動し駐留することになってしまった。

まもなく軍司令部通信所に派遣され勤務についた。当時二十歳で軍歴半年余りの二ツ星の兵隊であったが、無線通信のプロの私にとっては最高の働き場所と思つたが、長くは続かなかつた。八月十五日正午、軍司令部の講堂のラジオで玉音放送をきかされた。雑音だけでわからなかつたが、軍司令官の話からようやく終戦の詔勅であることを知らされ、まったく信じられないことであつた。

これからの兵隊の行動運命がどうなるか皆目わからないし、軍司令官も「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び、今後軍と行動を共にして欲しい」とのこと、不安の念にかられながらも私たち兵隊ではいかにすることもできない。

通信所勤務に戻ると命令がでて、通信暗号書の焼却やら軍事機密文書の処分などで、司令部前の広場で燃やす黒煙がたちのぼる。

その後、ソ、満、鮮国境付近の羅津、羅南方面の部隊は、ソ連軍と戦闘中との情報に、「直ちに戦闘を

停止するよう、無線通信で命令を伝えよ」との軍命令がでて、私たち無線通信要員はモールス符号の生電文で、「戦闘をやめ、速やかに白旗を掲げ降伏せよ」と電鍵でんけんをたたき続けた。

いくら戦力が低下したとはいえ、まだ関東軍は健在で武器弾薬はいくらでもあるし、士気も旺盛で戦闘を続行しているに違いない。交替で電鍵を神に祈りながらたたき続けたのであるが、果たしてこれが受信されているかどうかはまったくわからなかった。

こんな電信放送を一週間続けたが、いろいろなデマ情報がとび、司令部通信所の私たちでも真実はつかめなかった。

やがて武装解除にそなえて、小銃の菊の御紋章をやすりでけずり抹消するよう命令がでると、敗戦がよいよ実感となってきた。

そして十余日の後ソ連軍の進駐となり、武装解除され丸腰の兵隊となったのである。興南港こうなんから日本へ帰すといわれ、ソ連船に乗せられ酷寒のシベリアへ、飢餓、重労働の苦難の抑留生活三年が始まるのであった。再びこのような悲惨な戦争を起こしてはならないと強く訴えたい。

昭和63年度

## 魔のセレベス海

長 島 信 雄

上日出谷在住

昭和十九年五月、私達の船団は上海港を後に一路東シナ海を南下した。いよいよ魔のセレベス海域へ入り予想が的中、敵潜の跳梁激しく、我が船団の内二隻が撃沈され水柱と共に海中へ消えて行った。一瞬にして船もろとも二千余名の尊い命を呑み込んだのである。戦争の恐ろしさを思い知らされた。甲板で見ていた私達も、船室へ戻り各自が装具のまとめにかかった。その時ドスン……と物凄い音と共に、甲板から海水が滝のように流れ込み、階段はふつとび、船内はまるで蜂の巣をつついた様なありさま。我先に縄ばしごをよじのぼり甲板へ出て驚いた。見れば海面までは十層以上もあるのに、次々と蛙の様に飛び込む。下では銃を背負ったまま浮いている者、船内で怪我をした者、その血で海面を染めた。

退船命令で全員海に飛び込み、浮漂しながらも筏の上では軍歌を合唱して、兵隊の士気を鼓舞し合っていた。セレベス海の黒潮と、四方向向いても水平線のどまん中での軍歌は、悲壮なまでも涙ぐましいところがあった。やがてばらばらになった船団も海軍の救助のもとに一命を取り止め、五月九日ハルマヘラ島

のワシレ港に入り上陸することができた。

今は赤道直下夜空に輝く南十字星のもと、我が軍は海岸で陣地構築中、敵は戦爆連合で延べ三百機による初の大空襲を敢行し、我が一ヶ所の滑走路も二百ロ爆弾など大量に投下され使用不能となった。我が陸軍海軍協力し復旧に精出すも、以後連日の爆撃に、我が軍も対戦高角砲に続いて機関銃も一斉に火蓋ふたを切り、必死の応戦に努めたが、その時隊長以下多数の兵士が壮烈なる戦死を遂げ、むなしく南海の孤島ハルマヘラの露と消えた。

この悲惨な戦争が何時まで続くのやら、今日があつて明日がないのが戦争である。また、その頃モロタイ島が敵の手に落ちた。そのため我がハル島も、艦砲射撃やグラマンに機銃掃射で連日飛来しては多くの戦死者を出した。私達はそれから、密林の中を移動しながら約一年食糧難と悪戦苦闘の連続であつた。

あれから既に四十四年も過ぎ、ともすれば忘れがちになる、遙か南海の孤島へ骨を埋めた多くの戦没者へ、限らない追悼の誠を捧げると共に、現在の様な平和な時代が永久に続くことを祈らずにはいられない。

## 平和を希<sup>ねが</sup>う

前 村 政 雄

南二丁目在住

先の大戦からやがて半世紀になろうとしている今日、平和であることの有難さと同時に戦没者の尊い犠牲を忘れてはならないと思います。当時は唯<sup>ただ</sup>只<sup>ただ</sup>管<sup>かん</sup>に国を守る為、死して帰らずとも靖国神社に英霊として祀<sup>まつ</sup>られることを最も誇りとする時代であった様に思います。最愛の妻子と今生の別れをしたもの、又父母兄弟に涙を秘めて勇躍故郷を後にしたものの等々、それぞれ盛大なる歓呼の声と旗の波に送られて戦地（外地）にたつたのであります。

北支<sup>ほくし</sup>中支<sup>ちゅうし</sup>の戦線に終戦まで六年有余、幾多の激戦に遭遇しており、中でもとりわけ大禮<sup>たいらい</sup>彦の戦闘は忘れることの出来ない一つであった。早朝より戦闘開始五時間有余、相對峙すること約三百<sup>ほむ</sup>の包圍態勢にあつて更に一時間有余、全くの膠着<sup>こうちやく</sup>状態で「サツマイモ島」に腹這いのまま後統の重火器部隊の援護射撃を待つて突撃出来たこと、時の戦闘こそ正に「窮鼠<sup>きゆうそ</sup>猫を囓<sup>か</sup>む」の諺通りの熾烈なる戦況であつた様に想<sup>おも</sup>う。

戦終わって同年兵武井君の戦死は言葉にならずとも大きなショックであつた。如何に覚悟は出来ていた積もりでも、遠く故郷を離れての若者の心境は必ずしも穏やかではなかつたのであります。（昭和十六年

八月)。

また陳美莊ちんみさぶらの戦闘では、我が大沼小隊長戦死、上坂第一、山口第二各分隊長負傷(軽機関銃、小銃分隊)、其の他多くの戦死傷者続出で止むなく本隊は解散。前村第三分隊(擲弾筒くわだんじょう)を主力に新たに一ヶ分隊を編成して戦死傷者輸送の任務についた(昭和十六年四月)。数日して山口第二分隊長は遂に野戦病院にて還らぬ人となった。一晚中火葬して全員で骨を拾った。ある時は追撃のあまり敵と誤認され、味方の砲撃を受けたるも携帯の日章旗のおかげで危うく一ヶ分隊の戦死をまぬがれたこと等、死線とは常に紙一重にあつた様に想います。

今日の豊かにして平和な社会にある時、参百数拾萬の戦没者の皆様をはじめ多くの戦争に依る先輩皆様の尊い犠牲に対し、心から御冥福めいふくをお祈り申し上げるとともに、再び戦争の惨禍を繰り返さぬ様恒久的世界平和を祈りたいものであります。

平成元年度

## 最後の輸送船団と沖繩特攻

片岡

實

坂田在住

戦局に暗曇がたちこめた昭和十九年十二月、南方での航空機特攻訓練を行うため、シンガポールを目差して、私達操縦要員を乗せた黒潮丸は、船団を組み門司港を静かに出港した。朝鮮半島の西岸を陸伝いに北上し、青島、上海を右にみて、中国大陸の福建省沿岸まで南下する。ここから最も危険な台湾海峡を夜間一気に横断、台湾に接岸する計画である。

敵の魚雷攻撃がいつあるか分からない。救命胴衣を着け起きたまま一夜が明けた。突然ズドンとすさまじいさく裂音、敵潜の魚雷攻撃だ。退船命令のないまま甲板に駆け上がる。僚船宗像丸が被雷して、同期生等の多くの将兵や乗組員の方が、その犠牲となって戦死する。

ようやく船団は高雄港付近に到達して仮泊する。静かに朝のとばりが明け、東の空がほのみかけた頃、突如けたたましい空襲警報が発令された。私は幸いにも身一つで上陸することができた。後を追うように米機動艦隊を発進した二機編隊の艦上攻撃機が、何梯団にもなって来襲し、港内外に停泊している我が船

団を爆撃する。地上からは高角砲や高射砲で応戦するが、低空で動きの早い敵機を捕捉することは困難で、残念ながら味方船団は、小型船一隻を残して全船が爆沈する。不幸にも港外停泊中の輸送船に乗船中の戦友達は、海上に飛び込み辛うじていかだに捕まり、運を天に任せるが、これを見た敵機は、執ように激しい機銃掃射を浴びせかける。必死で海中にもぐり、これを避けるほかはない。多くの戦友達は敵弾を受け、悲壮な戦死を遂げ、海を鮮血に染める。誠に悲しい極みである。この空襲以来、南方への海上輸送は全く途絶し、私達は上陸したまま台湾軍に編入された。

戦局は更に進み、米軍は遂に沖縄列島に上陸を開始し、激戦状況が無線を通じて刻々と伝わってくる。私は飛行場中隊に配属され、沖縄へ特攻機を送る立場となった。

目前にみる従容として飛び立つ特攻機、果たして死地に赴く搭乗員の胸中は、いかばかりであったろうか。出撃命令に従い、黙々として祖国に殉ずる特攻隊員の心中を察するとき、切ない気持ちで一杯である。日本の未来を担う優秀な学徒や、希望にあふれた若い青年達が、戦争遂行の名のもとに空に海に散っていく。戦後四十五年、あらためて心からご冥福をお祈りすると共に、今の平和の尊さを後世に語り伝えたいと思う。

平成2年度

この一戦に勝たざれば 祖国の行方如何ならん

拜 司 トヨ子

泉一丁目在住

「この一戦に勝たざれば、祖国の行方如何ならん」と大地を蹴って、肉弾行に参加した特別攻撃隊員は、敵艦の甲板を、或は南の雲を血に染めて、南溟の海に散り、往きて還らぬ若鷲の、その消息を伝えるものはない。

戦後特攻隊に対する一般の批判は極めて冷酷であった。奇しくも我が亡夫（昭和六十三年十一月死亡）は当時特攻隊長として、その出撃の日のくるのを待っていた人である。出撃とは即ち死を前提とする文字通り死んで国を護ろうとする、忠君愛国の精神を具体化するものであった。

昭和二十年八月十五日の御聖断がなかったら、どんなことになっていただろう。

いま、戦後四十五年をふりかへり感無量である。特攻隊員が生死を乗り越えて「悠久の大義」に生き、そして彼等の願うところは日本の最後の勝利であり、日本民族のよりよい幸せと発展であった。「滅私奉公」の実践であった。この様な崇高なる行為を「このままにしてよいのか」と訴えたい気持ちになるのは私一

人だけであろうか。

御聖断によって、数万の生命と国土の荒廢が救われたことは、日本再建のために幸であつた。いま特攻隊員の英霊は、陸軍特攻機が一番多く出撃した鹿児島県の知覧飛行場跡に建立され、観音堂に安置されている。

たまたま昭和六十二年十月、宇都宮陸軍飛行学校の会合が鹿児島であり、知覧の遺品館で四十二年ぶりに主人の遺書を発見した時は、主人と共に感無量だつた。

私は世界に真の平和が確立されて、二度と戦争がおこらない様、祈って止まない。

## 海軍 「神雷部隊」

近 藤 陽 二二

下日出谷在住

翼幅わずか五尺という「小びと機」。注目すべきは八百キログラムの爆薬を積み搭乗員が乗り込み、自ら操縦

をする通称「マルダイ」は、空飛ぶ爆弾とも形容すべき翼の短いグライダーであった。別称「桜花」とも呼ばれ、後部に三本のロケットを装備し、これらが点火すれば時速六百四十キロメートルとなった。この桜花は母機である一式陸上攻撃機の腹部にだきかかえられ、目的地まで運ばれるのである。一式陸上攻撃機は二つのプロペラをつけ、航続距離はあるものの速度が遅く、米国では一式ライターと呼んでいた。搭乗員は六七名。私はこの母機の搭乗員であった。この部隊を神雷部隊と呼んでいた。

忘れもしない昭和二十年三月二十一日午前十一時、九州鹿屋基地指揮所前に、我々飛行隊員百六十名が全員整列した。私の飛行機は前日のグラマンの襲撃で燃料タンクが破損、野中五郎隊長によりメンバーからはずされた。飛行可能十三機（百三十五名）は白昼堂々と、日本海軍史上初のロケット部隊の出撃であった。護衛戦闘機零戦はわずか三十三機、結局途中グラマン百五十機の襲撃をうけ全機撃墜、全員戦死。「桜花」の初陣は悲惨な結果に終わってしまった。

其の後石川県小松基地に移動。四月中旬、突然攻撃命令が下った。「明朝〇六〇〇出発、鹿屋にて給油後云々」と。いよいよ出撃となったその時、何を思ったか、お国のためとか、天皇陛下のためとか、そんな事はひとつも考えなかった。「ああ、お母さんに親孝行してくればよかったなあ。おふくろさんにもつと親孝行してくればよかったなあ。」と、ただそれだけだった。

四十数年たった現在、同じ釜のメシを喰った十七歳か十八歳の同期生の面影を思い出す時、しみじみと戦争の残酷さ、悲惨さを身にしみて思う。

## 平成3年度

### 戦友の死を目前に次は自分か…

榎川平造

小針領家在住

昭和十九年四月に、村中の人たちに日の丸の小旗で送られて、兵庫県篠山東部百十部隊に入隊する。当時は、軍人になったことを誇りに思いながら入隊した。その後、四か月間に無線通信兵としての教育が一通り行われ一等兵となる。ただちに第三対空無線隊に配属になり、昭和二十年二月に門司港を出発して、南支那九龍に上陸する。航海中に、南支那海にマストあるいは船尾を上にして沈没している輸送船等が何十隻もみえ、この船には、何千人もの兵士が死亡していると思うと、身が引きしまる思いがした。香港の夜景を後に、広東郊外の西雲飛行場に到着した。そこで業務は、暗号の組立、解読作業で、受信機から流れるモールス信号を聞いて筆記などをしていった。その後、六号演習のため最終集結地の漢口かんこうに向け出発したが、至るところ爆破されており、迂回しながら進んだので相当歩いたと思う。機材は自動車便などを利用し、暗号は極秘物なので持ち歩いた。しかし、雨期のため重くなるばかりで、思うような食事もできず、下痢、発熱で、あまりの苦しさに耐え切れず、銃口を胸にあて自殺する兵隊もいた。疲れはて、つい

ていくのが精一杯で、歩きながらズボンの中で用を足したこともあった。また、ある時は線路を枕にして寝ながら、星空を見ていると、必ず故郷のことを思い出すのである。

この状態が二か月続き、その後、衡陽こうようで終戦を三日遅れで知らされ安堵あんじょする。そして、いつ帰れるのか心配しながら衡陽に駐とんし、その後、漢口を目指して出発したが、途中は列車で同年兵の谷垣真一郎氏と一緒に移動したが、谷垣氏は途中で亡くなり、線路脇に埋葬した。漢口の飛行場に二か月、その後鄂城かきやうに移駐した。ここでの生活状態も最悪で、毎日のように戦友が死に、自分の番がいつ来るかと不安な日が続く。

やがて復員船で佐世保に到着し、上陸と同時に復員手続きをして、昭和二十一年六月一日にわが家に帰還した。

最後にあの恐ろしい戦争が二度と起こらないことを、私自身念願するものです。

## 沖繩戦を体験して

与那覇 百子

下日出谷在住

昭和二十年三月二十三日から沖繩戦が始まりました。私たちひめゆり学徒看護隊は、陸軍病院へ動員を受けて、鉄の暴風の吹きあれる中、負傷兵の看護にあたっていました。

突然私の壕が鑑砲の直撃にあい全滅し、私は連絡へ出ていたため助かりました。二度目動員を受けて、第一外科の兵器廠壕にひめゆりの仲間六名は軍医に引率されて行くのですが、歩く畦道に兵隊がうつ伏せになって死に、足が編上靴の中に入ったまま飛ばされているのを見て、肝をつぶしました。だんだんと異様な気配がしてきました。壕の前には砂糖きびのきびがらが一杯ちらかっています。

壕の中に一歩足をふみ入れたら、壕内もきびがらでちらかり、地べたに大勢の重傷患者が無造作に寝かされていて、足の踏場もありません。血膿のついた包帯は黒ずみ、どろんこの毛布をかけて寝かされています。入り口の左側に寝かされている患者は、これでも生きているのかと思われるほど、顔面総つぶれでむしの息でした。

軍医はすぐに治療にかかりました。今までうめきつづけていた患者たちは、治療を受けてから静かになりました。きびがらの事を聞くと、「この壕に来て、四日五日たつが、だれも壕を見に来た者がいない。飢え

死にするよりはと畑へ行き、きびを折ってかじっているのだ。」私たちはそれを聞いて、仕事を分担して、飯上げ、水くみ、壕内掃除もやつと片付き、患者におにぎりを食べさせほつとするのもつかの間、死体片付けが終わっていないのに気がつきました。くたくたになってる体にむち打つように、十名余りの死体を二人で担架にのせて、艦砲の飛ぶ中を大きな弾痕をみつめて埋めました。死体は異常に重く頭髮は逆立ち、三十キログラム位にやせた私たちは、足元をふらつかせながら運ぶのでした。壕の中では一人ひとりが死んでいくのです。

毎日朝夕死体埋めでした。負傷兵の最後の言葉は「お母さん」と言つて死んでいくのが印象的でした。ある患者が私たちに、「陸軍病院はおれ達を入れて、一人ひとり殺す気か。」と怒りましたが、私たちがどうする事もできませんでした。軍医はその後三週間すぎても来ません。私たちが水を上げ、小さなおにぎりを一、二個上げるだけの看護でした。脳症患者はあばれるし、破傷風患者が苦しさにたえかねて自決する。この壕の事を私たちは、生き地獄の兵器廠と呼んでおりました。

いよいよ敵が迫り解散することになりました。重傷患者の枕元に青酸加里入りミルクを置いて去りました。皇国の將兵と讃えられた日本兵の戦場でのひとこまでした。

## 東京大空襲がもたらしたもの

和田 ふみ

川田谷在住(当時)

忘れもしない昭和二十年三月、東京下町に住んでいたが、一瞬にして焼失してしまった。木工業だったので機械はもちろんのこと全財産は灰と化してしまった。東京中の人たちが同じ悲惨な目に遭い、防空壕の中においてさえ爆弾で吹き飛ばされた家族の数も計り知れないのである。焼けただれ、黒焦げになって横たわる死体を見るにつけ、こうして家族四人が、逃げられ無事だったのは幸せなのだと思った。しかし明日からの生活を考えると地獄だった。

母と兄と五年生の私は、父について、飛驒の山奥へ疎開した。知人の口利きで納屋を借りて住むことになった。電気はおろか水道も畳もなし。あるのはいろりだけだった。まだ五年生の私には、どうするすべもなく、学校から帰ると農家の手伝いをして、さつま芋や菜っぱを少し、もらって来るのが関の山だった。もちろん父や兄の働き口もなく、持っているお金を小出しに、また母の着物を食糧に換えて暮らすしかなかった。毎日お腹がすいて目が廻りそうだった。配給も遅配だったり、一日分ザラメが湯のみ茶碗に一杯だった。それを三等分して、お茶をガブガブ飲んで満腹感を味わうしかなかった。まっ白いご飯を山盛りにして、ふうふうしながら食べる夢ばかりみていた。

私は、子供ながらに、なぜこのような辛い悲しい目に遭わねばならないのかと、毎夜、布団の中で一晩中泣いていた。早く東京へ帰ろうと言って父母を困らせてばかりいた。

戦争が悪いのだ。だれが戦争など始めたのだ。戦争をして何が残るのだろう。人間がお互いに殺し合いをするだけではないのか。戦死した人は、家族のこと、幼児のことを案じていたに違いない。

私たち家族は、生きていられただけ幸せだったのかも知れないが、戦争によって味わった苦痛や言い尽くせぬ悲惨さを、体験者の一人として、次の世代の人に語り継ぐ責任があると思う。戦争が遠く遠くなりつつある今、この平和が続くことを願って、つたない体験の一部を書いてみました。

平成4年度

## 敗戦の惨めさ 引き揚げ

宮内洋子

神明一丁目在住

終戦を中国の北支河南省開封<sup>カイフワン</sup>で迎えた私たちは、日本に帰国するには青島<sup>チンクワイ</sup>へ出なくてはなりません。開封から済南<sup>タイナン</sup>を経て青島に行く間、鉄道が破壊されていない箇所は、オンボロ貨車にゆられていましたが、銃声が聞こえ出すと貨車は止まり、やがて匪賊<sup>ひぞく</sup>の襲来で私達の持物を皆取られてしまいました。バケツ持参で腕時計を集める者、或る者は万年筆を、お金、衣類、食品、殆ど<sup>ほと</sup>の物が幾度かの襲来で取られ、怖さにごくがく震えました。鉄道が破壊された箇所は二列に並び、列から絶対離れぬ様、幼な子は負ぶってお互いに助け合い、歩いて歩いてどの位どの様に歩いたか、空のリユック一つを背負って…。途中、野宿した事もありました。

父は外交官でしたので梯団<sup>ていだん</sup>の団長を務めましたが、私達（母と弟と私）に「若し事故が起きたら一人の犠牲者も出せない、人質が必要ならわたしが行く、覚悟しておいてくれ。」と言われ、私は父が偉いので団長になったのだ、父なんて偉くなくなつていいのに、と泣きじゃくっていたのを思い出します。

幾日位かかったの全く覚えて居りませんが、やっとの思いで青島に辿り着き、数日後、LST（上陸用舟艇）で佐世保に向いました。途中舟中で亡くなった人が五人居り、その中の一人は赤ちゃんでした。舟中で亡くなった時は水葬にされます。五人の遺体は次々と海中に葬られ、同時に汽笛が鳴り舟は遺体の周りを三回転します。皆が合掌の最中でした。赤ちゃんの母親が「ユウちゃん、ユウちゃん、ごめんね。」と泣き叫んでいましたが、あつと言う間に海に飛び込みました。私は今でも、その時の情景と、父の「自分を失っても皆を救う。」と言う精神を忘れる事が出来ません。

やがて日本の烏々が…そして青々した緑と黄色の菜の花が目には映りました。「日本に帰って来たんだ、万歳！」誰かが大声で、皆、泣いてました。昭和二十一年三月三十一日の事でした。今でも敗戦の惨めさが心の奥深く焼き付き、永久に残る事でしょう。

## 炎の中を逃げた熊谷空襲

早川 美知子

若宮二丁目在住

終戦前夜の空襲、私の生涯であれ程鮮烈に脳裏に焼き付いていることはない。恐ろしく辛く苦しい出来事だった。

昭和二十年二月、私は二人の幼児を抱え、主人出征後留守を守り、東京本郷に暮らしていたが、連夜の空襲に疎開を決意し熊谷の母の元へ身を寄せていた。

八月十四日夜、遂に恐ろしい夜が来た。警戒警報発令後すぐ「東部軍管区情報、敵機新潟方面より侵入」と放送が有り、空襲警報も出ぬうち突然B29の轟音と共に焼夷弾がバラバラと落下、辺りは忽ち真昼の様になるようになった。警防団のわめくような叫び声、家の防空壕に入れば蒸し焼きになるだけと聞いていたので、今はこれ迄、死ぬなら皆一緒にと玄関先の部屋で布団を被って息を殺していた。その中一寸音が途絶えたので「逃げるのは今だ。」と、一人背負い一人抱きかかえて飛び出した。大露地通りに出ると、既に両側の家は火柱が上がり人々はぞろぞろと避難して行く。視界は只赤一色、炎が夜空を焦がし火の粉がバラバラと落ちて、此の世とは思えないすさまじさ。耳をつんざくような響き、一枚の布団をたよりに時々伏せをし乍ら、やっと土手に辿り着いた。荒川へ行く途中の桑畑迄行くと、大勢の人が避難していた。市

街地は赤々と燃えさかっている。時々油雨が降り身体を濡らす。姉と背中の子の息を伺い乍ら、なすすべもなく其処へ蹲うすくまっていた。

恐怖の一夜は明けた。帰るべき家はない。あてもなく本町の方へ来ると悲惨この上もない状態だった。焼けただれた電線、どこも焦り異様な臭い、リヤカーで死体や怪我人を運ぶ人、地獄とはこういう処かと思つた。途中で母や弟と出会い抱き合つて無事を喜んだ。途中立ち寄つた知人の家で終戦の放送が有つた事を聞き茫然とした。焼け付く様な日ざしの中をさまよい、避難所で炊き出しのお握りを口にしたのは夕暮れ時だった。その夜の宿は石原小学校だった。熱帯夜に加え汗と埃ほこりと人いきれでむんむんし眠るどころではなかつた。

疎開した家財を失い着のみ着のまま焼け出され、主人の実家も甲府で空襲により全焼、復員を待つた主人は還らず。その後の十数年は毒舌に尽くし難い辛酸を味わつたが、今は平和に暮らしている。国民を不幸に陥し入れる戦争は二度とすべきではない。

## 小隊の自決を救う

犬 木 貞 吉

(故人 当時末広、三丁目在住)

終戦の詔勅しよくわうが下った昭和二十年八月十五日、私は、今ロシアに返還要求中の色丹島で、独立白砲第十五大隊第二中隊本部の一兵卒として、事務室に勤務していた。

夕方五時過ぎである。前線の沿岸に配備されている鹿沼小隊の波多上等兵が顔色を変え、息せき切って中隊本部に駆け込んだのである。「中隊長殿！大変です。鹿沼小隊全員が自決します……」終戦の報に虚脱状態にあった中隊本部は俄然緊張した。早速横尾中隊長は古参軍曹二人を従え、馬で前線の鹿沼小隊に駆けつけた。うっかり近寄ると発砲されるといので、横尾中隊長は幕舎（兵舎）の遠くから大声で、「おれは中隊長だ！鹿沼少尉早まったことをするな！」と必死に説得した。やがて、小隊長以下全員が落ちついたらしいと見て、中隊長は静かに幕舎に入った。「近いうちに内地に帰れると思う。父母妻子のある兵隊を無駄死にさせてはいかん。どんなことがあっても耐えて再起を期そう……」懇々と論まじしたという。鹿沼少尉はかすかにうなずきながら「わかりました……」と。間もなく鹿沼少尉は小用に行くと言って表に出た。直後「バーン！」という拳銃の発射音。銃弾は鹿沼少尉のこめかみから頭部を横に貫いて……若い命を自ら断つたのである。

鹿沼小隊の自決計画によれば、十五日は夜通し最後の酒宴をし、十六日午前六時臼砲一発を発射し、これを合図に「上等兵が一等兵を」「兵長が上等兵を」「伍長が兵長を」「軍曹が伍長を」「鹿沼少尉が軍曹を」と順次に射殺し、最後は鹿沼少尉みずから「自決」する手はずになっていた。この計画は波多上等兵の決死の報告により、鹿沼小隊長一人が責任をとって終結したのである。

しかし、「アメリカカソ連に連れて行かれるかも知れない。おれはその屈辱に耐えられない」と言っていた鹿沼少尉の予言どおり、やがてソ連軍が上陸してくるのである。「日本は船が無いから代わって日本に連れて行ってやる。」半信半疑で乗り込んだソ連船は北海道を左に見ながら、非情にも遂に北上を始めるのである。「万事休す」――

そして、シベリアにおける忍従と屈辱の歴史が始まるのである。飢えと寒さで明日の命もわからないと思つたことも何度あつたことだろう。「どうせ死ぬならご飯を腹いっぱい食べて死にたい。」六万の戦友はこんな悲願の中で、祖国の父母妻子を夢見つつシベリアの凍土と化したのである。

〔編集注〕

犬木貞吉さんは、平成八年三月九日永眠されました。

平成5年度

「応募作品なし」

## 平成6年度

### 南方空輸記

増 田 哲 郎

(昭和十九年六月二十三日戦死)

昭和十九年一月十六日(木更津航空基地)

○五〇〇、起床。寒風吹きすさびあるを覚ゆ。何回目かの、南方空輸出発の朝なり。本年最初のこの空輸、無事にて終了するように、思う心や切なるものあり。

東の空ほのかに明けはじめた頃、指揮所内に整列。副長の注意あり、司令が、「出発かかれ」という。時刻を整合して、飛行機に行く。

一晩中、「白金カイロの大きい奴」をかかえていた一式陸攻は、たやすくエンジンがかかった。○七〇〇離陸、何時も、いい音をたてて離陸する。本隊に連絡をとる。やがて雲上飛行となる。高度三千、速力、百五十ノット。編隊は見事に組まれて、飛行場上空を通過発動する。朝餉の炊煙ほのかに立ちこめつつある房総をやがて後にして洋上に出る。遠く下界は、ミストがかかり、空は、あくまでも、紺碧色に晴れ渡り、そして遠く真白に雪を着た霊峰富士山を、指呼の間に見る。

ああ俺は男の子だ。日本男子だ。その上、海の荒鷲と世間で言われているのだ。男の中の男の子だ。

コンパスは、一途に、南へ南へと示している。ただ、雲と空と海面のみしか見えない。この洋上飛行、何をもって、この退屈、慰めんとするか。朝飯をする。後方を見れば、等間隔をおいて、編隊の新鋭機は、堂々と鵬翼をつらね、爆音高らかに飛行している。

父鳥を過ぎし頃より、手足の冷めたさを忘れ、はめていた飛行手袋をとる。やがて、防寒被服も脱ぎすて、防暑服となり、飛行服をつける。遠く、小さく、肉眼でも見える「サイパン島」が見え出すと、高度を下げるからではあるが急に暑くなる。やがて編隊を解散し「テナアン島」に着陸する。整列後、いろいろと注意あり一夜を仮泊する。

昭和十九年一月十八日

南方第一線基地近くなると、機長よりブザーにて警戒を知らせてくる。俺は、電報にて、各機に警戒を知らせる。搭乗員はすべて機銃配置につく。何時敵が、敵の飛行機が来ようと、すぐ応戦できるようと。だが、幸ひにも、基地につくまで敵に、巡り合わず、無事任務を終えた。列線につけ、エンジンを止めると、暑さが急に増したような感じがする。全身、汗びっしょりになって、身の廻りのもの、或は、基地物件の数々を整理する。

そのときである。○番を何発かしっかりとかかえた一式陸攻が、今まさに攻撃に征かんとして、滑走路の端にはいるではないか。やがて、一番機の合図によって、爆音勇ましく、離陸を始めた。搭乗員は、完爾として笑っている。なかには、日の丸の手拭を鉢巻にして、拳手の敬礼をして、にっこり笑って征った若武者も見た。防暑服に救命衣といった軽い出で立ちだ。一機が滑走路一杯滑って離陸した。また一機、日

焼けした赤銅色の面々は、眞白い歯を見せて、にっこり笑って、基地の人々が打ち振る帽子の、心からの声援に応えて、離陸した。又一機と。やがて、見事な堂々の編隊を組んで、一路南進。悲憤の涙をのみ、戦友の葬ひ合戦に、今、何回目かの、いや、何十回目かの攻撃に出発して征ったのである。目に涙して、その壯途を祝う。この一瞬の飛行場一面に起る光景。誰が、同じ、帝国海軍の搭乗員に非ずして「頼むぞ」「還ってこいよ」「うん、大丈夫だ。うん。うん。」と交す言葉が出ようぞ。まさに、死地に、笑って乗り込んで行くのだ。今も変らぬ、日本精神の根源を、今、目の前にはつきり見たのだ。誰が生を欲するか、死を恐るるや。日本人であればこそ、大和魂の持主こそだ。

#### 昭和十九年一月十九日

我々は、任務を終えて帰り途である。尊い、護国の華と散った、十柱の遺骨を、各機に分乗させて、内地へ、護送することになった。南方第一線で華と散りし御霊を、今なつかしの祖国へ送るのである。安らかにゆかれよ。

#### 南方出撃、戦死直前の遺稿

#### 崇高ナル死生観

#### 旺盛ナル攻撃精神

今ゾ發揮スベキ重大ナル秋ニ当面シタ。

元氣ナコトハ、人並以上ダ。

凡テガ勝ツタメダ。

大日本帝国ノ永劫ニ榮エントメダ。  
死ンデモ、何ノ未練ナキコノ身体、唯、米ノ撃滅アルノミ。

昭和十九年六月十五日

一二〇〇、飛行機隊ヨリ、一足遅レテ、豊橋海軍航空基地ヲ出發シタ。小隊二機ハ、俺ガ確実ナル通信ニヨリ、基地ニ、悪天候ヲ冒シテ出タ。再編成以來、此處豊橋ニ育クミシ我ヲ隊長ヲ長トスル、攻撃七〇三飛行隊ハ、今、コノ飛行機隊ヲ殿トシテ出發シテ行クノダト思ウト、名残ツキセヌモノヲ感ズルノハ人ノ常トデモ言ウモノナルカ。然シナラン。コノ度ノ戦ヲ、ソレヨリ僅カ數日ノ間ニ相見エントハ。

我ガ小隊ソモソモ木更津航空基地ニ先ズ、第一二車輪ヲ止メ、待機ノ姿勢にアリシハ、我ガ電報ノ受信、極メテ適切ナリシタメナリ。先發ノ飛行機隊ハ、ソレヨリ約二時間シテ続々ト着陸シ、時機ノ到ルヲ待ツ。其ノ夜道場ニ假泊ス。

分隊長ノ説明ニヨリ、敵ハマリアナ諸島ニ、連続空襲ヲ行ヒ、サイパン、テナアンニハ一部上陸ヲ敢行シツツアリ。ソノ機動部隊ノ量タルヤ実ニ、百數十隻ニ垂ントスルモノナリト。又北九州ハ空襲ヲ喰イ、八幡製作所ハ火災ヲ生ジタリトノコト。實ニ、危機、正ニ到来ス。我モ、コノ間着々ト戦備ヲ整エ、隊長ノ馳セ參ズルアリ。ソコニ、一言ノ訓示アリ。「我ニ現在の精兵アリ、勝算間違ヒナシ。八幡空襲部隊ヲ編成シ当面ノ敵ヲ撃破スルニアリ。」攻撃隊ノ編成ハ決定サル。精銳ナル搭乗員ハ陸行ニテ馳セ來ル。ココニ、「八幡大菩薩」ノ大旗、木更津海軍基地ニ翻エリ。

我ガ連合艦隊ノ、最モ頼ミトサレル、我ガ「第七五二航空隊、攻撃七〇三飛行隊」ハ堂々ト進撃ヲ開始

サレントスルニアリ。

其ノ間、最モ精銳トセル、一コ中隊ハ、館山基地ヨリ、低空見事ナ編隊ヲ組シテ来ル。ココニ、ソノ陣容全クナル。アア天空我ニ味方セヨ。我一目散ニ馳セ廻ラン…。

〔編集注〕

筆者の増田哲郎さんは、この日記の直後の昭和十九年六月二十三日、二十三才の若さで戦死されました。弟の増田利雄さん（若宮二丁目在住）のご意志により、形見となった日記を掲載させていただきました。

## 焼夷弾の雨の六本木

平野芳子

泉二丁目在住

戦後五十年、改めて確かめるような重い、年月に感じます。私は当時東京の六本木に住んでおりました。学校にゆくと、すぐ宮城前の楠正成の銅像の処に連れてゆかれ、カマスの中に掘った土を入れて、四人位

で運ぶ仕事でした。この泥は何につかわれるのかしらと、考えながらも、誰も口に出さず、只もくもくと運び屋をしておりました。

本土空襲が始まり、三月十日の下町の焼けた夜は、山の手からは眞赤な炎が、夜空を、こがしているのを、皆でぼう然と眺めていたような気がします。

私の家は五月二十四日の夜でした。照明弾がまず落され、眞昼のように明るくなった処に、焼夷弾が雨の如くに降って来たのです。

六本木には、東部六部隊と八部隊がありましたので、多分狙われたのでしょうか。

裏の公園に横穴式の防空壕が、掘ってあり逃げこんだのですが、何故か、兵隊さんが、はっきりとした記憶ではありませんが、七、八人程、木箱を抱えて飛び込んで来ました。

空襲もやがて治まり、明け方の四時頃になって、壕を出て、煙りのくすぶる中を、我が家の跡に行ってみました。昨夜にといたお米がお釜の中で炊けて、こげて、そして眞黒な炭のようになっていました。焼けただれた土地に佇む人々は、言葉もなく、頭の中を駆けめぐったものは、どんなことであったか、今は思い出せません。家族は無事でしたが、近くに一人、性別の解らない一体が、ころがっていました。終戦の放送は恵比寿駅のホームできました。その中の一人が、突然、「日本は負けたんだ、年寄りと女と子供で一生懸命銃後を守って来たのに……」と叫んで、泣き出しました。私はこれからどうなるのだろうか、ぼうつとして涙も出なかったような気がします。今、六本木で遊んでいる人達は、まさかこの六本木が、炎の海になったなど、思ってもみないでしょう。

## 集団疎開

岡 部 正 枝

坂田在住

先日アンネ・フランクとホロコースト展を見せていただき平和の尊さを実感致しました。

私当時六年生、毎日防空頭巾を持つての登校です。先生より田舎のない人は集団疎開に行くようにと毎日のように話が有りました。両親の許を得て、長野県下高井郡野沢温泉に疎開する事になりました。勉強はそれぞれの旅館が学校になります。週三回位だったと思いますが藁草履をはき薪を二本背負い山から旅館迄運びます。小さな身体の私には無理だったのでしよう。残念な事に肋膜炎になってしまい、母に迎えにきてもらい、終戦を前に東京足立区の家に戻りました。私の家は焼け残りましたが、本木新道、両商店は焼野原となっていました。

良い制度になり年一度健康診断のハガキをいただき必ず健診を受けます。医師がレントゲンに古い肋膜炎のあとが残っていますと話して下さいます。

平和の尊さに感謝致します。

## 原爆雲と広島を見た

新井 浩

川田谷在住

広島市の南に江田島が、約四十km離れた所に学校があり、その一生徒として生活しておりました。八月六日、朝の自習が各自習室でいつものように静かに行われておりました。

その静けさの中を突如、青光りが横切ったのです。“電気がショートしたのか、電気をつけてみる”という声、電気はつきました。同時にグラグラと地震のような衝撃がありました。青光りは古い電車のパンダグラフが時々走行中青い光をバシツと発するような感じでした。

自習を終り、講堂（教室）で授業を受けるため生徒館前に集合、四列縦隊で歩行してゆき北に向かった時、山の北側で色つき入道雲ともいえるものがモクモクふえるのがよくわかるような状態で上空に昇ってゆく。その時は恐らく広島軍の弾薬貯蔵庫が爆発したのだろうと考えておりました。夜になると、暗闇の北の空を赤々と焦しておりました。

それから数日後、アメリカの新型爆弾が広島に投下されたと発表があり、広島出身者の帰宅が許されました。――終戦――

数日後、私達も一時自宅待機となり地方別にまとまり広島まで船で送られ、駅に立ってまわりを見た時、

山々は松が多いのですが殆ど茶色に変化しており、まちはきれいに焼きつくされており、この土地には二度と緑が戻らないと噂されておりました。安心しきっておった人々の上に原爆は落されたのです。焦土のまちでは毎日毎晩死体の山にガソリンをかけて焼き、悲しみ、哀れの存在のない地獄だったと思われれます。幸いに一命をとりとめた人々もその後の放射能に犯されて寿命を短くしてゆく毎日の苦痛は亡くなられた人々以上のものだったことでしょう。

列車満員のため夕方まで屋根のない放射能いっぱい残るホームに立ってピカドンの恐しさ、戦争の愚かさ等について話しました。

それから五十年の歳月が流れました。

平成7年度

## 戦争体験記

大坂 正義

神明一丁目在住

その日、昭和二十年八月十五日は、朝から晴れ上ってうだるような蟬しぐれが降り注いでいた。所は、神奈川県座間にあった旧陸軍士官学校。

私は、昭和十七年九月末に旧制大学を六ヶ月間短縮されて卒業した。従って大学生活は二年半。

そして、学徒動員による臨時召集があり、同十月一日に台湾第四部隊（台湾歩兵第二聯隊第三中隊）へ入隊した。

当時の学生は、祖国のため連合軍を撃滅せんとの強い決意をもつての卒業であり、入隊であった。

入隊当日部隊長から「お前達の生命（いのち）は、この私が預った」と訓辞されても、当然のことと受けとめた。

そして、スリッパで撲られたり、の苦しい六ヶ月間の初年兵教育や幹部候補生教育第一次、第二次試験もどうにかクリアして北支にある保定陸軍予備士官学校（旧蒋介石軍官学校）の第九期生として、八ヶ月間

鍛えに鍛えられた。

二言目には、「貴様らそんなことで将校になれるとでも思っているのか」が口癖の教官と助教。そして鉄拳が飛んだ。

全国から集った数百名の候補生全員一言も不平を云わず、黙々と励み、国のために死をも辞せず、と固く心に誓っていた。

そして、同校を卒業。見習士官となって軍刀を吊り、更に少尉となって、ソ連と対峙する厳寒の北滿の警備を経て前記神奈川県座間の本土防衛部隊に組み込まれていた。と、突如として、終戦の詔勅を聞き、只々茫然自失なすべがなかった。

その時間いた詔勅の御声と燦々たる陽光とそして蟬しくれが、五十年を経た今でも、はっきりと脳裏に残っている。

## 戦争の傷を後世に伝えて

秋 山 昌 茂

上日出谷在住

戦後五十年、その当時を語れる人が少なくなり、改めて永い年月が過ぎ去った事を感じます。

昭和二十年八月十五日、終戦の日は、朝からジリジリと、暑い太陽が照りつけていた。

今日で戦争が終わったと聞いて、何故か、涙が止まりませんでした。この戦争が、もう少し早く終わっていたら、広島、長崎に原爆が、東京の大空襲もなかったのでは。いま思い出しても、恐ろしかった昭和二十年三月、あの夜の事が、私は当時十一才、東京の世田谷に住んでおりました。

連日、昼夜を問わずやってくる、B 29のお客さんは、今夜は大編隊の様子、窓ガラスがビリビリと音を立て、鳴った。空襲警報のサイレンが鳴り終わらないうちに、照明弾の光があたりを青白く照らし、焼夷弾が燃えながら唸りを上げて落ち、付近の家は物凄い勢いで燃え上がり、火の海となりました。

先を争って逃げ惑う人で、道は蜂の巣をつついた様になっていた。三十米先に爆弾が落ちた。一瞬のうちにその場所にいた人は、吹き飛ばされたのか。前の方を見ると、家は壊れ道は大きな穴があき、そこにいた人達が消えておりました。

落ちてくる、爆弾の風を切る音で、身体を地面に伏せ、目と耳を両手で押さえておりましたが、爆風の

ためか、頭が割れる様に痛く、耳はガンと鳴り、何も聞こえない。炎は前、後、横の三方から迫まり、身体が焼けるように熱い、母は姉と私の手を握り、まだ燃えていない、路地から路地を走り抜けた、後ろを振り返ると、東京の町は火の海、空も真っ赤に燃えて見えませんでした。

悪夢の一夜が明ける、見渡す限り、焼け野原になった道を、我が家に向かって歩いた。途中逃げ遅れたのか、黒焦げになった人が、道で折り重なって、多勢焼け死んでいた。疲れた足で、やっと家があった場所まで歩いて来たが、家は焼けていた。それぞれが、背負って逃げたりユックサックの非常食を食べ、水筒の水を飲み、焼け跡整理の手伝いをしました。

翌日、被災者にカンパンが配られた。十粒が一日分と云う、水を沢山飲んでお腹を満たした。夕食が済むと、姉と掘って建て小屋が建つまでの間、母の知人宅に泊めさせてもらい、母は、焼け跡荒らしが横行しているため、品物が取られないように、防空壕で見張りをしていました。焼け出されてから二週間後、分けて貰った古材と焼けたトタンなどで、八畳一間の掘って建て小屋も完成した。こんなとき兄が家にいれば、母もさぞ助かったことだろう。数日後、新聞の見出しに、本土決戦一億総玉砕まで戦おう、と書かれていたが、私の兄は昭和十七年、十五才で海軍航空隊に志願、十八才の時、特攻隊員になったその報告が最後で、兄から便りはなくなった。霞ヶ浦で同期生だった、特攻隊員の人達から、母に最後の手紙が届いた。

そして、沖繩の空に、国を護るため、十八、九才の若い命を、サヨウナラの最後の言葉を残して散っていった。

母は、この悲報を聞く度、夜布団の中でよく泣いていた。もしこの戦争が無かったら、家と親を止くし、食べ物と寝る所を求めて、上野の地下道に浮浪児はいなかったのではないだろうか。母も配給食だけでは

育ち盛りの私達には食べ物が必要なため、筍生活をした。お金があっても、食べ物を分けて貰えない時代、筍の皮を一枚一枚剥がすように、母の着物が茶箱の中から消えて、米や薩摩芋に化けた。今でも我が家の押し入れの中で茶箱が一つ、当時をそっと偲んでいるかのよう……。――

その母も、平成五年十月、九十六才の高齢で他界。

大東亜戦争で、数百万人以上の尊い命が失われました。もう二度と繰り返してはならない、戦争の悲劇と悲惨さを。この真実を知っている人達が、次の世代を担う若い人に伝えて、世界中に胸を張って誇れる「平和な国の日本」にしなければ、国のために命を捧げた人達の魂が、浮かばれないと思います。

## 終身忘れられない東京下町大空襲

森

敏五郎

末広三丁目在住

戦後五十年、あの暗黒の時代から早半世紀を過ぎ、当時私は千葉県東葛飾郡浦安町に生まれ住んでおりました。私の戦争体験記としての文章とは少々掛けはなれる場合があると思われませんが、一部の体験をお話ししましょう。

第一に昭和二十年三月九日の未明あたりから十日にかけて、東京は、下町深川に大空襲がありました。当時私は六才でしたが、私の近所の大人の人達が、西の方向に向って大勢ザワザワしながら歩いて行くのです。その内父親が、私の手を引いて大川（現江戸川の一番下流）に行ってみようと連れて行かれ、浦安橋の欄干に立って、西の方向を見渡すと、その西の空が真赤に燃え上って、空高く火柱が幾つも幾つも立っておりました。

今思うと焼夷弾が雨あられのように、米空軍のB29が深川の街を焼尽していたのです。その火の子が西風によって浦安の街にまで（深川から浦安町まで約十二〜三キロ）襲いかゝるよう飛んできて……。

その頃は、浦安の街もあちらこちらに葺ぶき屋根の民家があり、大人の人達は屋根に登って飛んでくる火の子を振り払っておりました。その様子は五十年過ぎた今でも、はっきり覚え、又忘れる事が出来ない

のです。第二にこの暗黒な戦争さえなければ、まだ若くして命を無くす事もなかったのではないかと思われれます。六才の私にとって、大切な……優しい、又甘えたいその母親が、病に倒れ二十年五月、まだ終戦を迎えない冷たく暗い防空壕の片隅で、医師にも診てもらえず息を引取ったのです。結びに平和とすることが如何に大事なことを全世界に訴えるものです。

## 五十年前の追憶

白 子 邦

西一丁目在住

昭和十九年十二月或る日、夜遅く実家（埼玉県桶川市上日出谷）の兄に戸を叩かれて目を覚ますと、もしかしららと思つた通り赤紙（召集令状）を持参したのです。そして三日後には横須賀の海兵団へ入隊です。戦争も愈々深刻な状況の中、行く場所に依つては生きては帰れない事を思い、其の夜はまんじりともせず涙を抑えるのに必死でした。

やがて夜が明け、近くの天神様へ武運長久を祈願に行き、実家の兄はひと先ず帰り、出征歓送の準備をするとの事でした（当時は村を上げて盛大に送られたのです）。当家では甥が最年少十五才で特攻隊に志願して、カロリン諸島のペリユウ島にて戦死（十七才）昭和十九年九月二十六日付の通知による。三男は麻布三連隊現役入隊後、北支谷川部隊へ召集、一時帰還。再度の召集にて千葉へ入隊後小等原諸島にて終戦。昭和二十年十二月帰国。四男は昭和十九年春召集、北支へ派遣。終戦を迎え昭和二十一年に帰国。五男主人は昭和十九年末横須賀海兵団へ召集。六男、昭和十八年土浦海軍航空隊へ召集。軍艦天城外三隻を乗りつぎ、南洋を点々とし九死に一生を得て、長崎ドックに入り、終戦は海軍省で迎え一年後帰宅。男六人兄弟の内四人が出征致しました。

主人は軍関係航空写真研究所勤務でしたので、一番最後の出征です。丁度其の時私は妊娠三ヶ月、つわりの最中でした。気をしっかり持ち直して村の方々多勢のお見送りに応えるべく頑張りました。駅まで二十分の道を日の丸の小旗を持って長い行列です。そして駅頭で万歳の声、日の丸の旗の波に送られて、故里を後に致しました。残る一日は入隊当日、住居の有る現在の新宿区大久保にて、町内の皆様の盛大な歓送を頂き、夫は無事入隊致しました。

配属は衛生兵と云う事で、戸塚の海軍衛生学校へ入学となり、五月に卒業後竹山の部隊へ廻されたと、それまでわかったのですが、其の後はプツリと音信も絶えました。

其の前よりB 29は盛んに東京上空の偵察を始めました。外出は防空ずきんを持参で空襲に備え、空襲警報が鳴る度に一段と緊張したものです。幸い私の実家が隣町でしたので、気強く過す事が出来ました。毎日スコップを手に天神様を下がったところの土手を利用して横穴式の防空壕を掘る作業です。お腹の赤ら

やんも大分目立って来ましたので大変でした。配給の品物を班毎に貰いに行くにも、途中で空襲警報が鳴って小走りに帰った事も度々でした。

愈々頻繁に敵機来襲が始まり遂に三月十日夜、浅草や上野、両国や深川の下町方面が大空襲を受け、一夜にして何万人もの犠牲者が出たのです。丁度其の夜は実家に居ましたが、空は真赤で、遠く円形に闇夜を焦がす火の海の様に見えてびっくりしました。後で知ったのですが、逃げまどう人々は、火に追われて川に飛び込んだり、地を這う猛火に包まれ多数の死者を出したのです。

それから一ヶ月後四月十三日今度は旧牛込区から旧四谷区、淀橋区など新宿を中心とした山の手方面にアメリカ軍B29の大編隊が襲来したのです。夜空を焦すどころではありません。新宿方面は照明弾が雨の様に降り、真昼の様な明るさです。やがて大編隊がゴーゴー向って来るのがわかり、女子供は広い場所へ避難せよと叫んでいます（当時小学生は学童疎開して居る）。私は父と妹を残し、母と末の妹とリュックには出産時の必要な物を背中に、胸には鏡を着けて防空ずきんの上から水をザーザー被り、都電通りへ出て戸山ヶ原（元陸軍演習場）へと逃げようとなりましたが、横町と三つ横町は火が廻り、電柱が倒れはじめ、行く事は出来ません。どうしても新宿御苑まで急がなければと、天神様の下の道を花園町へ抜けられればと思ったが、片側は火が廻りはじめ、途中所々に有る水槽の水を被り乍ら熱い思いをして夢中で御苑までの道を急ぎました。今考えても時間は記憶に有りません。B29より落す焼夷弾は破壊力はないものの、火災を発生させる点では抜群の力がありました。木造家屋ばかりの日本の街に廻りから油を撒き、燃え上がらせたのだから実に効果的広範囲に亘って燃え広がって行ったのだと思います。多くの荷物を持って逃げた人は火の勢いが予想以上に強く、その熱さに耐えきれず荷物を棄てて逃げて行くのに必死です。防火

帯と云う事で幅二、三十メートルもあつた空地も、置きざりにしたふとんや荷物に着火して、防火帯が逆  
に火の海と化したと聞きました。早めに逃げ出した私達も、多分大木戸辺りの入口から御苑に入ったと思  
いますが、中は真黒に人、人、人です。何々さん何子と互いに呼び合う声だけ闇の中で聞えます。暫く落  
付いてふと上を仰ぐと、赤く写る空のもと、ほの白いものが一杯です。良く見てみますと、なんと八重桜  
が満開だったのです。どの位時間がたったか、やがて空襲警報も解除となり、じつと我慢して夜の明ける  
のを待ちました。一睡もなく立ったりしゃがんだりして悪夢の一夜が過ぎ、やがて東の空が白々として来  
ると、早速父と妹を残した家に帰る一心です。なんとか生きて居て呉ればと祈るのみです。御苑の外へ  
出て見るとなんと町の様子が一変して、電柱は焼け折れ、電線は垂れ下り、方々の水道管からはシューシ  
ューと音を立てて水が噴き出していて、瓦れきの山の下には未だ火がくすぶり続け、一面に煙を立ち昇ら  
せて見渡す限り焼野原と変つてしまつた。

そんな中をとほと足を引きずり乍ら、気持は急いでもなかなか早くは歩けません。家が近づくにつ  
れ、遠くでもわかる父と妹の姿を見た時、ただただ無性に涙が流れて来ました。焼跡に真黒にくすぶつた  
顔で立つて居ました。同じ町内でも焼残つた所が有つて、皆さん総出で炊き出しをして、おむすびを一つ  
ずつ頂きました。お互いに生きていて良かったと実感しました。後で知つたのですが、逃げ遅れて崖下の  
窪地や陸軍戸山学校の塀沿いに焼けただれた老若男女の焼死体が折り重なるように倒れており、とても正  
視できない位無惨な姿であつたそうです。

早速居所はわからないけれど、入隊した横須賀海兵団へ家族が焼出された旨を連絡を取りましたところ、  
三日間の休暇が出て主人は帰つて来ました。被災証明を区役所へ貰いに行つたり、種々手続きを済ませて

取急ぎ実家（埼玉）の両親の元へ時間をかけて行きました。慌しい時の流れがうその様に、故里は静かで緑が多く安心して一夜をぐっすりと休む事が出来ました。農村でしたので翌日はもち草を摘んで草もちを造って頂き、また東京迄戻りました。焼け残った知人の家に一夜御厄介になり、翌日主人は隊の方へ戻りました。私は身重の事も考えまして、母と一緒に長野の母の里へ疎開する事になりました（関東地区では危険と云う事）、早速準備をして上野駅は混雑で無理という事で、遠廻りでも新宿駅から中央線で行く事にしました。こちらは大へんな混雑で乗れるかどうかと思いましたが、幸い駅員の方が妊婦の私を見て車掌乗務室へ案内して下さって、ギューギューづめの列車の中の方々には申し訳ないのですが安全に長野駅迄行く事が出来ました。あの時の事はほんとうに感謝申し上げます。

長野は祖母の家が一番奥の縁側に面した佛様の有る室に落ち付く事が出来ました。段々とお腹は大きくなるし、不思議と不安とか淋しいとかの感情は余り受けずに過す事が出来て幸せだったと思つて居ります。時々昼間母がリュックを背負つて買出しに行つて呉れまして、長野はリングゴの産地なので妊婦には特別配給が有つたり、近くに伯母の家が有り、大へん皆さんにお世話になり、食べる事には心配無く生活出来ました。ほんの一時ですが空襲の事も忘れる思いが有つた様に思います。その頃流言蜚語など、ニュースもどこ迄がほんとうなのか見当もつきませんでした。

そんな八月の或る日、長野にも愈々空襲がと云う情報が入り、夜は落付いて寝る事も出来なくなり、愈々今夜と云う事がわかり、出産用具のリュックを背に、防空ずきんと持てる物を持って全員で善光寺の裏山へ避難する事になりました。辺りは一面のリングゴ畑の有る山路なので、一歩一歩お腹をおさえ乍らの登りです。落ちたリングゴが足にぶつかったのを今でも良く憶えて居ります。大分登った處で腰を下ろし様子を

見る事にしました。幸か不幸か其の夜は少々はずれて、長岡市が爆撃を受けたのです。静かな山の中なので音が聞こえたように感じました。

警報解除の知らせに、一歩一歩転ばない様に気を付けて山を下り、家に帰り早速佛様に手を合せて、皆んなで長野は佛の都だから佛様が守って下さったのだ、と一應安堵致しましたが、十二日頃でしたか艦載機が飛んで来まして、駅周辺に被害をもたらしました。それから間もなく十五日の終戦となり、御詔勅を座敷に正座して全員で涙してお聞きしました。其の時の気持は、言葉では表す事が出来ない思いがそれぞれに有った事と思います。其の日の夕方全市民と申ししましても過言ではないと思う程、善光寺様へ向ってぞろぞろぞろぞろ人の波が押し寄せて、ただただ黙々と善光寺様へ手を合せたのです。そして其の月の二十六日夜日出度く男子を無事出産する事が出来ました。

## 附記

子供達の声が聞こえませんか

なぜ世界のどこかでおとな達は戦争をするの？

なぜおとなは戦場へいくの？

子供達は戦争は大きらいなのに、

なぜ子供達の事を考えてくれないの？

なぜおとなは、平和で楽しい世界をさらうの、

おしえて、わけを？

## いのち拾い

小 島 壽 男

下日出谷在住

昭和二十年八月十五日、朝から暑さの厳しい十時頃、私は秋田市に近い仁井田村の堰で唯一人で泳いで居た。泳ぎながらふと見上げた青空の一点に黒いものが見え「なんだろう」と思う間もなく、あつと云う間にその黒点は爆音と共にみるみる大きくなり、私をめぐって高度を下げて突込んで来た。

「あつ、グラマンだ。撃たれる。」そんな恐怖心が私を襲い無意識のうちに水面下に潜った。「今顔を出したら狙撃される。息は苦しいがもう少し我慢して」と思い、出来るだけ長く潜って居たが、限界が来てそつと水面に顔を出した時、グワーンと爆音を響かせて上昇して行く敵機に赤ら顔の操縦士の顔がはつきり見えた。

「撃たれなかった。助かった。でも何故助かったんだろう。」昨夜は近くの士崎港の大規模な空襲が有つてごうごうと一二〇機にもほるB29が飛び交い、赤々と港が燃え、多くの死傷者が出たというのに今日はサイレンも鳴らず私も殺されなかった。子供だった私は、昨夜の空襲と今日の撃たないグラマンとのギャップが仲々理解できなかった。それを教えたのは正午の天皇のラジオ放送だった。こうして私は、一日違いで生死の境を越えたのだった。

## 天津山丸撃沈と機銃掃射

長 島 信 雄

上日出谷在住

昭和十九年三月、いよいよ関東軍の大移動で私達も南方転進のため新京を後に中支上海へ向った。当地で楓兵团四二五六部隊へ編入され、そのうち誰れ言うもなく楓のシニゴロ部隊と勝手にきめて気にする者もいた。

その後一ヶ月余りで部隊の編成を組み、当時輸送船はおもに二万トン級のものが多く、一個部隊の人員、兵器、弾薬、馬など楽に乗船することができた。五隻の船は次々に錨いかりをあげ上海港を後に一路東シナ海を南下した。船団には呉の海軍が護衛にあたつたのである。船内は狭く身動きさえできず風通しは悪く、まるで蒸し風呂のようであった。それから数日していよいよ魔のセレベス海域へ入り海深は約四千メートルもあるといわれ、特に敵潜艦の攻撃を受けやすいところと聞いていたがその予想が的中、敵潜艦の跳梁りょう激しく我が船団の内二隻が撃沈され、水柱と共に海中へ消えて行つた。一瞬にして船もろとも二千余名の尊い命を呑み込んだのである。戦争の恐ろしさを思い知らされた。甲板で見ていた私達も船室へ戻り、各自が装具のまとめにかゝつた。その時ドスン…と物凄い音と共に甲板から海水が滝のように流れ込み、階段はふつとび、船内はまるで蜂の巣を突いた様なありさま、我れ先に縄はしごをよじのぼり甲板へ出て

驚いた。見れば海面までは十メートル以上もあるのに次々と蛙の様にとび込む、下では銃を背負ったまま浮いている者、船内で怪我をした者、その血で海面が染まった。退船命令で全員海にとび込み漂流しながらも筏の上では軍歌を合唱して兵隊の士気を鼓舞し合っていた。セレベス海の黒潮と四方向いても水平線のとまん中での軍歌は悲壮なまでも涙ぐましいところがあった。やがてばらばらになった船団も海軍の救助のもとに一命を取り止め、五月九日、ハルマヘラ島のワシレ港に入り上陸することができた。

今は赤道直下夜空に輝く南十字星のもと南国の海、植物見る物聞く物まるでおとぎの国へでも来たようであった。南の激戦地でこんな静かな生活が不思議でならなかった。数日前セレベス海での魚雷攻撃が夢のようである。それもつかの間、我が軍は海岸で陣地構築中敵は二ヶ月もたためうち戦爆連合で延べ三〇〇機による初の大空襲に見舞われ、我が二ヶ所の滑走路も二〇〇キロ爆弾など大量に投下され使用不能となった。我が陸、海軍協力し復旧に精出すも以後連日の爆撃に、我が軍も対戦高角砲に続いて機関銃も一斉に火蓋を切り、必死の応戦に努めたが、その時隊長以下多数の兵士が壮烈なる戦死を遂げ、むなく南海の孤島ハルマヘラの露と消えた。

また、ある時は直撃を受けた戦友の骨を拾い、小枝を使ってバナナの葉の上に集め枯木を積み上げて火葬した。今まで元気で語り合った戦友もあつと言う間にこのような姿になる。この悲惨な戦争が何時まで続くのやら、今日があつて明日がないのが戦争である。また、その頃モロタイ島が敵の手に落ちた。そのため我がハル島も艦砲射撃やグラマンによる機銃掃射で連日飛来しては多くの戦死者を出した。ある時は死者や負傷者をトラックで運んだこともあつた。ひとこととは思えない。自分も、何時このような姿になるかと思うと目のやり場に困り足がすくんだ。私達はそれから密林の中を移動しながら約一年、食糧難

と悪戦苦闘の連続であった。時には敵の銃撃で弾丸が身边をかすり、命からがら洞窟へかけ込み危く一命をとり止めた。長期戦のため戦場も銃後も共に苦しい悲惨な思いをした。

あれから既に五十一年も過ぎ、ともすれば忘れがちになる遙か南海の孤島へ骨を埋めた多くの戦没者へ限りない追悼の誠を捧げると共に、現在の様な平和な時代が永久に続くことを祈らずにはいられない。

## これが戦争だ

加 藤 義 一

寿二丁目在住

幾度か生死をくぐり抜けた戦争の体験、それは忘れようとしても私の身体の一部として消えることがない。長い戦地生活を誰にも語りたくはないが、それはたくさんの戦友を失い、また生死をかけて働いてくれた多くの人達にその大恩をどうして返したらよいか五十年たってしまった。

あと幾日か桶川市報の体験記募集が迫っている。そして「知りたい、知らせたい」と言う表紙の文字に

刺激され、常々思い乍らも書くことは個人の体験であるが私だけではない、過去のことだと風化させてはいけない、知ることによって、戦争の悲惨さを知り二度と繰り返してはならないことを、若い世代に語り残して行かなければならないと、決意した。

生か死か。

雨のように降り注ぐ弾丸、追撃砲弾の爆発、楓部隊は、山東省臨済県張家石河附近の敵根拠地を包圍した。時―昭和十七年八月二十八日未明。第一線攻撃隊三浦中隊は一挙に城壁手前五十mまで突進したが、敵の猛射は間断なく中隊長はじめ死傷続出攻撃は膠着した。私も鉄帽に弾丸を受けたが鉄帽が身代りとなってくれた。私は、いつも鉄帽の中に母の写真と成田山のお護りを入れていたが、きつと私を護ってくれたと思っている。じつと動かない中隊長、肩を射抜かれて苦しんでいる山田兵長（機関銃手大宮出身）だが動けない、敵の標的になるからだ。

私は、指揮班長としての重責がある。三浦中尉戦死の伝令が走る（すべて匍匐前進）。「八時三十分三浦中隊は聯隊砲の支援により突入すべし」と伝令が来た。よし三発目に突入だ、あと何分がある最後だ。皆が堅く手を握り合った。一本の莩を廻しのみした。小銃を持つ兵は弾丸を後弾丸入れに移した（これは突入した時乱射をして友軍を射たないための鉄則だ。）私の腰には隊長の備前袴定があつた。身動き出来ない敵前、砲撃開始。七五榴弾砲は耳をつんざくばかり、城壁に突入路があいて行く。

「血に染みて散るを楓の誉れかな」。何も無い「生か死か」、私には突入あるのみ。

「上官の命令は理由のいかんを問わず直ちにこれに服従すべし」、これが軍隊の掟だ。三発目の砲撃の爆煙と同時に突撃と共に、敵の榴弾と機関銃の雨だ。倒れる戦友、全員前のクリークに飛び込んだ（幸

い水はない)。友軍重機関銃隊の援護射撃により人梯子を組んで城内に突入した。きらめく銃剣、打ち合う銃声、双方入り乱れての死闘は暫く続いたが、敵は城外に待ち受ける山口部隊の前面に敗走して行った。決死の突入により張家石河は遂に陥落した。

戦死者の處理、炎々と燃え上る火葬に消えて行く戦友、その夜半、敵の夜襲をうけ、火葬の中隊長はじめ戦友をコモに包み唐家林と言う安全な部落まで転進せねばならなかった。この戦闘に於いて、三浦中尉（東京本所出身）、無二の親友伊藤伍長（鴻巣市出身）はじめ多くを失った。

私は熾烈を極めたこの戦闘に、軍人の範として部隊表彰を受けた。それは今となつては私の若い時代の青春の傷跡かも知れない。時折り亡き戦友を想い乍ら部屋に掛けられたこの額を見乍ら、いつもこんなことがあつてよいのかと思うばかりである。

### 沈む輸送船

私達楓部隊は、上海に集結。昭和十九年四月南方戦線に轉進の命を受けた。十五船団の輸送船は、私達には勇壯にしか見えなかった。だが、戦局は異常に發展していた。台湾海峡で一隻轟沈され、パシー海峡で二隻が轟沈された（轟沈とは、敵魚雷を受けて沈むまで三分間）。一隻の船に六〇〇名位乗り込んでいるが、助かったのは僅か六〇〇名位と言う。人も車も馬も一瞬の内に炎渦巻く海底に没する。私は目の前で火の海となつた海上に兵隊がくもの子を散らすように船首と共に海中に突込むその様子はこの世のものとは思われなかった。私達の船は、右に左に全速力で魚雷をかわして行つた。

私達の船団は、駆逐艦に守られ乍らも赤道直下モロッカ諸島のハルマヘラ島に着いた。

海岸に茂る椰子の木と青く澄んだ海、戦争でなかったらこんなよいところはないと私達は思ったが、戦

況悪化を知り、ここが悲惨な戦場と化そうとは、作戦指導者のみがか知っていたのかも知れない。

上陸後直ちに海岸より数百m入ったところに宿営地がつくられ、急遽防空施設がつくられて作戦作業は開始された。

日本軍の集結を知った敵は、猛爆、猛射を間断なく開始、遂に目前にある「モロタイ島」に敵は上陸した。

「好機到来貴軍の奮闘を望む、東條英機」と本国からの電報を受けたのはその直後であった。私の所属は師団司令部であり、もう日本には帰れない予感がした。

其の後激しい敵襲をさけるためジャングルの奥に作戦司令部は二回目の陣地移動をした。

### 何よりも強い母の愛

敵、ハルマヘラ島に向う進入は丙棧橋（舟着き場の符号）方向、マイクの声も必死だ。進入丙棧橋なら目標は作戦司令部だ。全員慌ただしく防空壕やタコ壺に入る。数分もない落下傘爆弾と機銃掃射だ。話も出来ない、昼も暗いジャングルが爆音と共に大木が倒れ硝煙の臭いで一瞬にして戦場と化した。

私は三回目の猛爆に身体全体にたたかれるように大きなショックを受けた。スーと目の前が暗くなって行く。「カアちゃんさようなら」と失神状態に陥いつたが、私は今戦争体験記を書いている。私には母が誰れよりも大切な人だった。商人で努力家でどんなことにも我慢した母、出征の時、孫を背負い乍ら日の丸を振ってくれた無言の母、いつまでも睨から離れなかった。そしてあの時、私はあの時「カアちゃんさようなら」が私のすべてだったのだろう。

戦時思想教育は「忠君愛国」と「天皇陛下バンザイ」が軍隊の象徴用語であった。が、母の愛は何より

も強かった。

### 死から帰って来た人

チヨットお訪ねしますが加藤曹長さんではないですか、と立派な紳士から声をかけられた。私の軍隊時代を知っているのは戦友かと直感した。「ハイ」と答えたが、紳士は大森軍曹です、大森正雄です。差出す名刺に東京に支店を開設のため出向して来ておりますと、広島第百五銀行の重役の肩書きがある。勤務先日本銀行でのひとときである。

奇跡の人大森さんとは、戦局は日に日に悪化、師団司令部を襲った猛爆に大森軍曹はタコ壺に埋り手首一本で生き返った。

爆撃直後此処に誰れかいるぞと、掘り起こされ人工呼吸で蘇生した大森正雄氏、その人であった。

私達の戦争体験は数知れなくいろいろなことがあった。それは総べて生と死がかけられていた。

私の部屋に掛けられた思い出の軍服姿の写真がある。孫がその写真を見て、「おぢいちゃんこれ誰れ、何を着ているの」と聞く。孫には異様な姿に見えるのであろう。この孫の時代に戦争が風化され、またまた私達が体験したことが繰り返されたらどうなる。私達は戦争体験を語り継ぎ、二度と繰り返してはならない。そして忘れてはならない。それが亡き戦友達へのせめてもの饞けであり、生死を共にした私達の使命ではないかと思う。

若人よ、強く正しくたくましく育ってほしい、そして平和を忘れてはならない。

終戦五十年、世界の日本として恒久平和であってほしい。「戦わない日本」それが戦争で命をかけて体験した私達の願いである。

## 終戦五十年にして私の戦争体験を一言

島 村 守

東二丁目在住

耐え難きを耐えと言ふ昭和天皇の悲痛な声のラジオ放送があつてより、今年で五十年になりました。昭和二十年八月十五日がついこの間過ぎ去つたことに感慨無量であります。

終戦五十年と一言に言うけれど、私共はその前昭和十二年八月より戦時に従軍しました。私は平時の現役兵として台湾歩兵第一連隊に入營、そして除隊。その後御多分にもれず二回の召集。第一回目は支那事変、第二回目は太平洋戦争に従軍いたしました。その間約九年位となりますので、その間、様々な戦地経験があります。とり敢えずかいつまんでその惨酷さを簡単に記入致し、戦争の資料となりますならば幸に存じます。

まず人生とは人は生きる。生きて居れば何時かは幸が訪れる訳ですが、戦争はその反対。他の国の人々

を殺し合ふと言ふことで、それだけ考えただけでも戦争は行うべきものではない。私が言うまでもありません。私は、第一回目の召集では支那事変で主として中支方面に従軍しました。私は重機関銃部隊でしたので何時も戦闘の時は第一線にて活躍した訳ですから、何時も敵に狙られるのも私共の重機関銃部隊でした。また、その反対に敵を殺傷するのも、私共の重機関銃であったように記憶しております。戦地に行つて始めて、敵弾に倒れる戦友達を目前に見ながら前進する訳ですが、その戦友が敵弾に倒れる瞬間よく戦前天皇陛下萬才と言つて戦死すると言ふことを聞いていましたが、私がいかに経験したところでは、そのような言葉を聞いたことは一度もありません。お母さんとか妻子の名を呼びながら息を引きとることがしばしばありましたが、ほとんどの戦友があつという間もなく亡くなることが多数でした。私は揚子江遂行作戦、そして九河呉城及び南昌攻略戦を最後に、第一回目の任務が終り昭和十五年一月一日召集解除となり、久しぶりに我が家に無事帰ることができ、私の父母は涙をながし喜んでいました。

そしてそれもつかの間、第二回目の召集令状が昭和十五年九月に來ました。それが即ち太平洋戦争でした。赤坂の近衛歩兵第三連隊に入隊、そこで第三十二碇泊所司令部と言ふ部隊を編成して東京芝浦港を出港、一路海南島へと輸送船は進み、そこで所謂太平洋戦争の準備のため内地から佛印方面に行く部隊を輸送の任に當つた次第です。その後インドネシア方面に転進、インドネシアの油田を確保、そして内地に原油を輸送するのが任務でした。しかし輸送の途中で米軍の潜水艦に攻撃され、原油は殆ど内地に輸送されることはなかつたようです。

そして私は遺骨還送にて約千柱の戦友の遺骨を大阪まで無事に陸軍省の係官に渡し、私は広島島の船舶司令部付を命ぜられ、その後広島島の司令部で昭和十九年五月まで勤務致し、その後陸軍省本省に転勤、昭和

二十年十二月召集解除になりました。しかし、広島及び長崎の原爆とともに、忘れることができないのが、今なお昭和二十年三月十日の東京の大空襲に劣らぬ惨酷極まる、無差別爆撃であります。私は陸軍省に通勤致しておりましたので、上野駅前を通り、下谷、湯島附近を通り陸軍省まで歩き、そのときの東京市民が、防空頭巾をかぶり、火たたきを持ち、遂に息絶えている数々の人々、男女、今以って忘れることのできない生地獄でありました。

とにかく戦争とは恐ろしさと悲しみのみが残るのみにて、決して二度と、戦争は起してはならないと言ふことを記して私の一言を終わります。

## 子供の目の高さの戦争

中 島 京 子

下日出谷在住

昭和九年生まれの私は、学童疎開の第一陣として国民学校三年生の夏、疎開先の青梅に出発した。今の

JR青梅駅は東京への通勤圏内であるが、出征兵士のように送られた幼い私達にとっては品川から実に遠い田舎に來たという感じであった。しかし車中の記憶は全くない。

お寺の隣りの公会堂の広間を、たたんだ布団で仕切った六畳弱の空間で五・六人づつ六組程の班に別かれた共同生活が始まった。

味噌汁の野菜を洗い切る、お新香を切る、ごはん、汁を丼に盛る、それらをテーブルに並べる、その後片付けと洗いもの、部屋と廊下の掃除、タライでの洗濯をする、学校に行く、それが日課であった。公会堂の前を通る青梅線の線路を泣きながら、東京の方に向かって走って行く友達を、何回もつれ戻すことがあった。

時がたつにつれ家族恋しの心が皆を包み始めたのだ。夜、布団の中で泣いている友達が多くなった。

長男が三年生になった時、この子と生き別れ死に別れることを想像して胸をかきむしられる戦争の恐ろしさを痛感した。

敵の攻撃目標とされた京浜地区の品川にあった実家より先に、立川飛行場が空襲にあい、真赤な炎が燃えるのを見ても戦争の実感を感じられない幼い私達であった。しかしそれを機に親が子供をつれ戻しに來て仲間が何人も帰ってしまうのは本当に悲しかった。

或る日疎開先の学童疎開の小国民のために、東條英機陸軍大将が激励のためにお見えになるとのこと直立不動でその話を聞いた。私の傍らをピカピカの長靴と長い軍刀が通り過ぎた。アリとライオンの例え話で日本人はアリで皆でかかれば米英のライオンを倒すことが出来る、必ず勝てるという内容であった。本当にアリはライオンに勝てるのか、子供心にも不安であった。皇后陛下から学童疎開児にラクガンが下

賜された。何日も甘い物に無縁だった私の口の中ではそれはあつという間にとけてしまった。私達はいつもいつも腹を空かせていた。農家が道端のむしろの上に拡げて下していた芋を何回盗んで食べたことか。いけない事をしていることより、空腹に負けた手が伸びていた。

友達の泣きそうな恨めしそうな目を背に、私は母と共に品川の家に帰った。何日も頭のシラミ退治をして貰った記憶がある。

やがて強制疎開という名目で家がこわされることになり、父と兄は東京に残り、母と私と弟、妹は母の実家の水戸に行くことになった。大人達がどんな思いでバラバラになり、田舎が私達を受け入れたか、子供達は知らず母と一緒、もう一人で淋しい思いをしないですむとうれしさで水戸に向かった。

しかし勝田という軍需工場や、敵機の侵入口である鹿島灘に近い水戸はやがて全市の炎上となった空襲や、戦闘機の機銃掃射、艦砲射撃にさらされることになる。

私達は学校に着いたと思うと退避のサイレンで家に走って帰るといふ毎日であった。

或る時、そのサイレンで妹の手を引いて、もう誰もいなくなった道を走っていると、不気味なキューンという変な音、とっさに溝にころげ込んだ。私と妹のそばの地面に機上からの掃射の弾がポツポツと土煙りが上がった。あまりの驚きで死ぬという実感はなかった。

戦後の名画「禁じられた遊び」の中でソツクリなシーンがあった。その時私の背中に鋭い痛みが走った。十年以上たつて見た映画の一シーンが戦争で死ぬという恐怖を体の中によみがえらせたのだ。

やがて灰燼の東京に再び戻り、敗戦の玉音放送を聞く。大人は皆黙って聞いていた。その夜、電燈の黒いカバーを外した時の明るさが目にしみた。敗戦後、何日ぐらいたったか父と知人の所に食料を貰いに行

った時の新宿駅構内での出来事も子供の心に焼付いた光景であった。大雨が降った直後だったのだから屋根が焼落ちたホームへの通路は私のひざまでの雨水があふれていた。ホームの階段を上って行くと、肩草をとってしまった陸軍将校服の若い男が軍刀を支えに、かすれた声で大声で泣きながら、もう一度戦うのだと訴えていた。もう一度もう一度という言葉と玉砕という言葉が耳に残っている。人々はただチラッと見ただけで通り過ぎて行く。私は父に手を引張られるまで見ていた。

小学校と再び名称が戻った六年生の担任は特攻隊帰りの若い先生だった。特攻隊の制服を着て白いマフラーの先生は、年配の女の先生ばかりを見なれていた私達の目には、軍隊のスリッパをビタビタと云わせて、二部教授の教室の戸を元氣よく開けてくる様子が何とも眩しく映ったものだった。先生は私達に戦争中のことを喋らせたり書かせたりした。

級中がその話に引き込まれたのは、満洲から引き揚げの途中、荷馬車からころげ落ち、馬に乗った匪賊に追われながら、馬車の人の手をつかんで助かった時の恐ろしさを語った時だった。皆、さまざまな恐ろしい体験を多かれ少かれ持っていたと思う。そして自ら特攻くづれと称していた先生は今思うと厭世的な劣閉気を持っていたように思う。

恐怖心をおおる空襲のサイレン、赤々と燃え上る空、地面をゆるがす爆弾の音、急降下の戦闘機の音、青白くユラユラと下りてくる探照燈の光、逃げ場のない艦砲射撃の轟音、それは私の原体験として、記憶の中にインプットされている。

そしていつも小さな胸をしめつけていたのは、どんな人とも突然会えなくなる、それが戦争なんだという切ない思いだった。

## 私の場合

鎌 倉 千 光

坂田在住

最近、日本と中国合同でテレビ化された、山崎とよ子原作「大地の子」をみた。

それは、開拓団の一員として家族と一緒に渡満していた十歳ぐらいの男の子が、太平洋戦争（一九三九―四五）で日本の敗戦となり、日本に帰ろうとする途中、ロシア兵に祖父と母を殺され、妹とは無理やりひきさかれて一人ぼっちとなり、そのショックで日本人であることすら忘れてしまう。

その後親切な中国人にひろわれ、大学まで卒業させてもらうのだが、日本人であるためにさまざまに抗らうことのできない運命に翻弄されながら、成長するまでの物語だった。

画面にみる戦争のむごたらしさ、その悲惨さは想像もおよばぬほど、言語に絶するものだった。

その「大地の子」からみれば、私の戦争体験などとるに足らぬ小さなものだが、それでも今だにはつきり記憶の中に残っているのは、ひもじかった思い出だけである。

私の家は東京の下町にあった。城東区（現江東区）大島という所で、家の脇に路地をはさんで大きな軍需工場があった。昭和十九年、小学校へ入学した年の夏、学童疎開が始まった。両親は集団疎開には参加させず、父の実家福島に兄と私を縁故疎開させることにした。

隣り組の面倒を一手に引き受けていた父にも、おそい赤紙が来て出征する日がせまっていたある日、私達を連れて福島に向った。二本松駅を降りて二里半の道のりを、父の実家まで歩いた。バスは通っていたようだが、ない時は歩く以外方法がなかった時代である。

生まれて初めて家族から離され、見知らぬ土地での生活に、不安で胸がいっぱいなのに、いやとはいえず、終戦間近いという緊迫した雰囲気は肌で感じられていたし、甘えも、わがままも許される状態ではなかった。淋しい気持ちを我慢して、黙々と歩いたあの数時間を決して忘れることはないだろう。

集団疎開して行った近所の友だちは、昭和二十年三月十日の東京大空襲で家族を失い、みんな孤児になつてしまったと後で聞いた。縁故疎開したお陰で孤児にならずに済んだのだから、何が幸いするのかわからないものである。

伯父の家での生活は二年足らずだった。よく面倒をみてもらったのに、その間のひもじさの方が強く印象に残っている。いつもお腹が空いていた。それが証拠に、朝学校へ行く時、「いただきます」といつて出かけた時があったと、後年、よく従兄が話題にした。「よほどお腹がすいていたのだろう無理もないけど」という。

同じひもじさでも、終戦後家族がそろつてからも、食糧難は続いていた筈だが、余り切実な覚えはない、きつと家族一緒という安堵感があったからではないかと思うのだが……。

戦争が終つて、B 29の爆音もない静かな毎日が来て、二年ぶりに家族がそろつたのは、山形の片田舎にある母の実家の近くだった。父の出征中、母と三人の姉妹は、三月十日の東京大空襲の数時間前、やつとの思いで東京をのがれることができたのだという。

その晩、久しぶりの母の手料理で笹麦で作ったスイトンを食べた。そのおいしかったこと、今でもあれ以上のご馳走はないと思っっている。

その笹麦だが、地元では昔から飢饉の年に限って、熊笹に花が咲き、稲の穂のような実をつけるといい伝えがあった。昭和十九年にも花が咲いて実がなり、その実を粉にひいて、みんなスイトンなどにして食べていたのである。

わずか一、二年で自然に花は咲かなくなつたから、いい伝えというものの、現実に花が咲いて実を食べ、救われたのだから不思議な現象であつた。それ以来花が咲いたとは聞いていない。

そして野生の実も豊富にあつた。子ども達は野山を遊び場に、野イチゴ、スカナ、シオデ、山栗など、よく食べたものである。

戦後五十年が過ぎた今、飽食の時代といわれて久しいが、身近なところでも、平気で食べ残したり、粗末にしているのを見ると、苦しかった頃を思い出す。

食べられない状態を子ども達に話して聞かせても、理解できないのが現実である。今も世界各地で戦争は絶えず、飢えに苦しんでいる子ども達の多いことを知る時、戦争のおろかしさが悲しく心が痛む。

一日も早く、この世から戦争がなくなるのを祈らずにはいられない。

## 戦争の思い出

岡 田 愛 子

上日出谷在住

それは昭和十九年頃のことだったと思います。私は大分県の石仏で有名な臼杵町（現在は市）の国民学校五年生でした。戦争もだいぶ激しくなり、B29爆撃機の大編隊が轟音をとどろかせて頭上を北上し、毎夜のように空襲警報のサイレンが鳴り、隣組で掘った防空壕へ逃げ込む日が続いておりました。防空壕といっても、高台を下の道から掘った横穴で、湿気でじっとりしていました。そこへ帯芯で作った肩掛け袋の中に食料としてそら豆の炒ったものや、教科書を入れ防空頭巾をかぶってゴザの上に座り警戒警報解除になるまで待っていました。

学校の校庭にも、学年毎に飛び込めるように五メートル四方くらいの露天の防空壕の穴をいくつか掘ってあり、そのまわりの空いた校庭には、さつま芽を私たちの手で植えていました。それは飛行機の燃料になるのだと聞いておりました。授業の中で竹槍の訓練もさせられました。今考えてみると敵に向かって竹槍なんか持っていては何の役にも立たないことは明白です。

そうこうするうちに昭和二十年に入り、昼間に艦載機がやってくるようになりました。授業の途中で団体下校することになり、その帰路急に空襲警報が出て艦載機が頭の上に飛来し、私達学童は道路の両側に

一列に身を伏せてじっと動かないで飛行機の通り過ぎるのを待って家に帰ったものです。

幸いに私の住んでいた臼杵は、特別大きな町でもなく爆撃の目標になるようなことはありませんでしたが、ある農家の人が牛を引いて歩いていたとかで艦載機の標的になったそうです。

それからますます空襲もひんぱんになり、学校には行かずに各地区毎にお寺さんのお堂などを借り、午前中だけ授業を受けるようになりました。

忘れもしません昭和二十年八月十五日。その日は朝から空襲もなく、いつもとは違って何か変だなあと感じていました。おひる十二時から玉音放送（天皇陛下のラジオ放送）があり無条件降伏とのこと——。お寺の堂で先生から敗戦の話聞き、先生はそのまま仏様の方を向いて目をつぶり、身じろぎもせず長い間座っております。多分泣いておられたんだと思います。

こんな悲惨な出来事は二度と決して繰り返してはなりません。戦争はすべてのものを壊し、人と人の殺し合いです。人類滅亡の道を辿るだけです。地球上に軍事用核なんかあつてはいけません。

子供の頃に経験したB29編隊爆撃機のゴォ音、艦載機の向かってくる音その射撃音、戦争の悲惨さ、脳裏にはつきり焼き付いて死ぬまで忘れられない光景です。

## 学童疎開と空襲と…

田 中 委 左 美

下日出谷在住

午後十時十六分、小松川第×国民学校（東京都江戸川区）の学童を乗せた臨時SL列車が上野駅を出発した。昭和十九年八月十九日、土曜日。晴れていたが、むし暑い夜だった。

小学三年生から六年生までの学童集団疎開の出発である。その中に防空頭布を背中に、だぶだぶのカーキ色の国民服を着た五年生の私と三年生の妹がいた。行く先は、山形県加茂郡にある湯野浜温泉であった。鶴岡駅で電車に乗り換え、終点の湯野浜駅に着いたのは、翌日の正午頃であった。湯野浜温泉は砂丘が広がる日本海を目前に控え、すぐ後に山が迫り、道を挟んで左右に二十軒ほどの旅館がある。当時はひなびた湯治場だった。

私達は、山側の「大野屋旅館」に入った。

授業は学年毎に行われ、月に一回程度は徒歩一時間をかけて「加茂小学校」に行き、校舎を使つての授業が行われたのだった。

湯野浜温泉の自然は美しい。山に登り、赤とんぼの群れに囲まれ、荒波の日本海に大きな夕陽が砂丘を染めながら沈んでいく、秋の夕暮れの光景は今でも忘れられない。

自然の美しさとは裏腹に、学童の疎開生活は悲惨だった。裏日本の天候は、十一月に入ると毎日雨やみぞれが降りしきり、やがて雪に閉ざされた密室の世界となった。

学童集団にはシラミがまん延した。つぶすたびに爪が血に染まり、下着の縫い目には卵が列をなし、電灯のひかりに無気味に光っていた。

私たちが親元に出す手紙は、決まって「元気です」「楽しいです」「がんばります」と良い子ぶりを伝えるものであった。教師や寮母の検閲後に封をする制度が書かせたのだ。

当初、一日三合五勺（六百三十CC）の主食の確保が決められていたが、日を経るに従ってその基準は崩れていった。

飢餓集団化した学童たちに「いじめ」が始まった。最上級生のボスは小ボスに食糧のピンハネを命じ、小ボスは低学年からピンハネした。

そして、弱者に難くせをつけ「仲間はずれ」にした。当然、食糧は没収された。「仲間はずれ」は一週間で他の者に移った。女子の場合は、男子より更に陰湿だった、と妹が述懐している。

自分の持物をいじめる相手の荷物に入れて、「なくなった」と騒ぎ出し相手を盗人に仕立てるのだという。こうした事件は教師や寮母には知らされない。密告は数倍の「いじめ」の報復が待っていたので、表面は平穏だった。

私と妹は十二月の下旬、学童疎開に別れを告げた。家族（父と義母と弟）が父の実家の群馬県に疎開したため、縁故疎開として転出したのである。

清水トネルを抜けた時の、太陽の輝きと青空のあまりの明るさに二人は驚嘆の声を上げた。

群馬県は、高崎市と渋川町（当時）の間にある群馬郡金古町という前橋市とも隣接している古い宿場町だった。

転入した私は「疎開っ子」と呼ばれ、結構「いじめ」に会った。しかし、学業の進度が早かったため、悪ガキに教えたことが幸いしたのか「いじめ」が少なくなかった。

また相撲が強く、ボスと対等に取り組めたことも作用したのかも知れない。東京では明けても暮れても相撲を取っていたのだった。

それでも、「生意気だ」といって学校の帰り道で三人の小ボスに殴られた。私は誰彼となく向かっていた。その勇気のせいか、「いじめ」はピタリと止んだ。

昭和二十年七月、十日間ほど高崎市郊外にある父方の親戚筋の農家に手伝いに行ったある日の出来事だった。

田んぼの草取りをしている時だった。いきなり米艦載機が低空飛行で現われ、機銃掃射を浴びて来た。私はとっさに腹這いになり水面から首だけ出した。

バリ、バリ、バリ、と私の右側五メートル程を弾が水しぶきを上げながら通過していった。

と、敵機は反転して隣の畠の人に襲いかかった。その時、機上の人形のような人影がはっきり見えた。びっくりした牛が無人の農耕機をひきずって走り回っていた。幸いこの機銃掃射でやられた人はいなかった。

農村とはいえ、非農家だった私の家の食糧事情は決して良くなかった。

「すいとん」や「雑炊」はまだいい方で、「ふすまパン」「あんかけカボチャ」なども食卓に上った。さつまいもの葉柄（もみぢ）も登場した。

それでも麦飯が多く、学童疎開のようなひもじさはなかった。

八月五日の夜、十一時を過ぎた頃、戸外が急に昼のように明るくなった。

「照明弾だ。すぐ逃げろ！」

父が怒（おこ）なった。蚊張の中で眠っていた私は叫（こ）き起こされ、裏の竹やぶにある防空壕へと走った。東京の空襲を知っていた父は、照明弾の次に起こる恐ろしさを予感したのだった。

やがてキーンという鋭い音とザーンと凄（こ）い夕立のような音がすると、パツと火柱が上がった。焼夷弾だった。

慌（あわ）てて壕にもぐり込んだが、それっきり物音がしないので、おそるおそる外に出てびっくりした。

東の空が赤々と焼けていた。前橋の街が燃えているのだ。この夜、前橋市を襲ったB29機は百機におよんだという。隣町のわが家の近くにも焼夷弾が降り注いだのだった。

その翌日（八月六日）、午前八時十五分、広島に青白い閃光が走った。新型爆弾という名の原子爆弾だった。七万八千人が死亡、五万一千人が負傷し、行方不明となった。

そして八月九日、長崎に二回目の原爆が投下され、二万四千人が死亡、千九百人が行方不明となった。

八月十五日。その日は真夏の太陽がジリジリと照りつけていた。近くの小川で遊んでいた私は、昼食のため家路に着いたが、大道路の家並みが妙にしんとしていて、人影が全くなかった。

家に入ると、ラジオがガーピー、ガーピーとがなり立てていた。父と義母が畳にべたんと座ったまま、首をうなだれていた。

それが、終戦宣言の天皇の「玉音放送」だと知らされても、小学六年生の私にはびんと来なかつた。

しかし、小学校に詰めていた軍刀を下げていた陸軍将校は姿を消し、竹やりと銃剣術がなくなった代わりに、教科書を墨で黒く塗りつぶす作業が始まった。

今にして思えば、この時の教師の心の痛みはいかばかりだったであろうか。昨日までの教えを今日否定する相克――。

そして、ついこの前までの「鬼畜米英」の兵士がジープに乗って麦秋の中を走るようになった。私たちはジープの後を追いかけると、「ハロー」「チヨコノ」「ガムノ」と叫び、笑いながらチヨコレートやチューインガムを投げて寄こす兵士に「サンキュー」と大声で言った。

昔も今も、子供たちに国境はない。

ただ、どんなことがあっても、誰の命令であってもエノラ・ゲイ（原爆を落下したB29機）の投下ポタンを押しではならない。それを拒否する人間になって欲しいと、今の子供たちに教え伝えることが、私たち戦争体験者の義務ではなからうか。

## 女子挺身隊の頃

野 口 富 子

下日出谷在住

古びた一枚の証書を、私は今も大切に持っている。昭和十九年四月、福岡県知事戸塚九一郎の名で「女子挺身隊隊長を命ずる」とある。あれから五十年余りの歳月が流れた。それは遠い昔の出来事のようにも思える。また手を伸ばせば届く最近の事のようにも思える。

第二次世界大戦の敗色が濃くなった昭和十九年、私は女学校を卒業した。

戦線の拡大と共に、障害を持つ人以外の成人男子は皆徴兵、徴用にとられて少なくなり、女子も卒業と同時に働くことが義務づけられた。クラスメートの中には、飛行機工場などで旋盤を使ったりして、かなりの重労働に従事した人も多い。

私は三十人の友人と共に、福岡地方簡易保険局に挺身隊員として働くことになった。風光明媚な大濠公園に面した四階建てのビルは、当時東洋一といわれた。契約変更係に配属になり、朝鮮、満州、台湾などに住む加入者からの、問い合わせに対する返事を書くのが仕事だった。

その年の秋、風速何メートルだったか覚えていないが、ものすごい台風が福岡地方を襲ったことがある。傘も差せない暴風雨のなか、大濠公園沿いの道を歩いて登庁した。市内電車も動かないため、出勤してき

た人は僅かだった。

「風についての出勤は、滅私奉公の敢闘精神そのものである」と、当日の出勤者に対し、劇場招待があった。戦争協力一辺倒の当時としては、希有（けう）のことだ。そんな崇高な？精神の発露ではなく、本当は暴風雨の中を歩くのが面白くて出勤したのだから、少々気は咎めたが、京都の劇団の講演は面白かった。はじめて女子挺身隊を受け入れた局側でも、いろいろ気を使ったらしく、心身鍛練の名目の阿蘇登山に、かなりの数の隊員を同行してくれた。「ガソリンの一滴は血の一滴」といった時代で、路線バスは廃止になり、赤水駅から頂上まで歩いて登った。米など食糧持参のリュックは重く道は遠かったが、雄大なカルデラ火山はひととき戦いを忘れさせてくれた。

その時私の荷物を担いでくれたOさんは、登山後すぐ応召、そのまま消息が絶えた。その頃Oさんのように、戦場に出掛けたまま、帰らなかつた人も多い。私を可愛がってくれた隣家のAちゃんのお父さんも、ガダルカナルで戦死したという知らせが入った。Aちゃんが三歳、その下に零歳の男の子、お母さんは二十八歳の若さだった。

「銃後の護り」ということで、その当時の日本人は神経が高ぶっていたのだろうか、つまらぬことで弱い者いじめがあった。一人住まいで、小型犬を五、六匹飼っている女性は、犬を供出するよう言われ、泣いているのを見たことがある。出さないでいると「食糧不足の折に非国民だ」と、警防団の人から罵倒されたそう。

その頃局のマイクからは、連日軍艦マーチが流れ、戦勝報告のあと常に「わが方の損害軽微なり」で締めくくられていた。

台湾や朝鮮、満州など海を隔てた場所からの書類は、まったくと言っていいほど、届かなくなり、まれに届いても、濡れた形跡があつて読みとりにくかつた。民間の船までつぎつぎ沈められていく戦いの厳しさが、何となく感じられはしたものの、その裏の真実は誰にも知らされず、その疑問を口にする人もいなかった。

しかしそのような事態になつても、どこか心の片隅で——日本が負ける筈がない、いつかは勝つ——という信念のようなものが常に働いていた。幼い頃から受けた軍国時代の教育で、正しい判断が働かず、盲目的になつていたのである。船が着かないので、仕事にならず、弁当持参でそろばんの練習に行くようなもので、その頃の一日は途方もなく長かつた。

サイパン島を基地として、アメリカ軍は次々日本空襲を始めた。昭和二十年六月十九日、福岡もB29爆撃機六十機による空襲を受ける。警戒警報と空襲警報が同時に鳴り、サイレンが鳴り止まないうちに、敵機襲来があつた。ウォーン、ウォーンと唸るようなB29の爆音が空を覆い、人々は不安を募らせた。ようやく飛び込んだ防空壕を揺るがして、爆弾の炸裂音が響き、家に直撃弾が落ちたのではないかと、母は青くなつたが、その焼夷弾は、石垣の塀を二メートルほど壊しただけで済んだ。

中洲や川端の繁華街が燃えているのか、東の空が真っ赤になつている。家が高台にあるので、爆撃の様子が手にとるように分かつた。B29が旋回して低空飛行する度に、小さな火の塊がばらまかれていく。焼夷弾は三十数個が連なつて、帯のように落ちてきた。

白っぽい浴衣を着た女の人が、枕を抱えて走ってくる。皆黒っぽいモンペをはいている中で、その浴衣

姿は異常だった。燃える火に照らされた顔は、目が血走り大声で何か叫んでいる。家が焼けて狂ってしまったのだろうか、哀れだった。

しかし狂っているのはその人だけでなく、誰もが異常心理になっていた。町全体が阿鼻叫喚で、それが大きな唸りとなっている。隣組の半数が罹災した。誰の顔も煤に汚れ、動き回っているのに空腹を感じない。夜明け近くまで空襲は続いた。

翌朝私は、睡眠不足のまま勤務先に向かった。危ないからと、母は涙ぐんで止めたが、行かすにはいられない何かがあつて、母を振り切り保険局へ急いだ。電車はもちろん動いていない。近道の直線コースで一キロメートルほどの、城外練兵場に到着して驚いた。柔らかな土に不発の焼夷弾が突き刺さり、草原が二キロ焼夷弾の林となっているのだ。長さ六―七センチメートル、直径十センチに満たぬ八角形の焼夷弾は、信管に触れると爆発し、人一人くらい造作もなく殺す。その焼夷弾の間を縫うようにして歩いた。

戦後も暫くは、この不発弾による死亡事故が相次ぎ、新聞紙上を賑わした。

局に着いてみると、入り口に数人の遺体が、何も被せられず横たわっていた。そんなのを眺めても、  
「明日はわが身」という思いからか、怖いとか悲しいとかの感情は働かない。

十七歳の青春を過ごしたあの時代は、「負け戦」という過酷な情勢の下で、一生懸命生きた日々だった。教育とは怖ろしいもので、幼い頃から戦争のためにはすべてを犠牲にして頑張れと、教え込まれると、すっかりその気になってしまう。軍国主義が国を支配し、その結果、沢山の命が戦場に散った。私の兄はピルマに征き、生還することができたが、出発前夜、台所で泣いていた母の涙は忘れられない。

あれから半世紀、戦後生まれの人が主流を占める現在、空襲のむごさも、挺身隊があつたことも、その

詳細を知る人は少なくなった。私自身が、戦いのことをそうしっかり知っているわけではないが、今でも  
う忘れ去られようとしているあの時代を、少しでも記録に止めておきたいと思う。教育によって、戦争を  
罪悪とも考えない方向へ傾いていく恐ろしさを、身を以て体験した者の、生きてきた証しのひとつとして  
……。

# いのちの伝言

— 私の戦争体験より —

発行 平成八年（一九九六）

編集・発行 桶川市企画財政部自治振興課

〒363 桶川市泉一―三―二八









